

# 2007925

## 絵本学会 NEWS No.31

発行：絵本学会

発行日：2007年9月25日

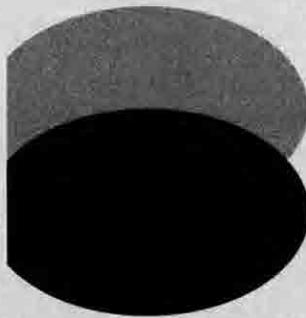
編集：絵本学会広報委員会

絵本学会事務局：〒567-8578大阪府茨木市宿久庄2丁目19-5

梅花女子大学児童文学科加藤康子研究室内

E-mail：ehon-g@baika.ac.jp

http://www.u-gaku.ac.jp/~ehon/index.html



絵本学会

2007年度大会・総会の報告  
絵本フォーラムのお知らせ  
絵本関係展覧会イベント案内  
事務局からのお知らせ  
・研究助成事業の実施  
・理事会  
・寄贈図書について  
・名簿の訂正について  
・事務局への連絡について

### 第10回絵本学会大会報告

第10回絵本学会大会実行委員長 今井良朗

2007年6月30日(土)と7月1日(日)の2日間にわたって第10回絵本学会大会が武蔵野美術大学(東京都小平市鷹の台キャンパス)で開催されました。

今大会は絵本学会設立から10周年にあたります。設立大会を武蔵野美術大学で開催し、10周年記念大会もこの武蔵野美術大学で開催できましたことを大変嬉しく思っております。

記念大会ということもあり、テーマの設定や記念イベントをどうするか実行委員会発足当初から悩みました。最終的には絵本学会設立時の理念をあらためて確認すること、学会である以上、お祭りではなく大会の質的充実を図り、武蔵美らしい大会にするということで準備を進めてまいりました。

1997年の設立大会では「絵本とは」のテーマでシンポジウムが開催されましたが、座談会「絵本学会の10年を振り返る」の中でも明らかにされたように、その後「絵本と子ども」をめぐるさまざまな意見が出されてきました。時には絵本学会の存在そのものを否定する意見もありました。絵本を通して子ども観は、つくる側にとっても受容する側にとっても立場が変われば見方が異なります。「子ども」は、絵本の世界で多様な使われ方をするあまり共通言語として機能してこなかったのではないかと、意識のズレや認識のズレがいつもともなっているのではないかと、ということがこの10年で見えてきたように思います。

いずれにしても優れた絵本として読みつがれてきたもの

は、どれも「子ども」の言語や規範を基盤に成り立っています。絵本は、「子ども」との世界をつなぐ方法論によって組み立てられていることが重要であることに変わりはありません。

この10年、異なった研究分野の交流によって、ようやく絵本が多様な研究の基盤を背景に成り立っていることが確認されたのではないのでしょうか。

今大会では「絵本の表現」をテーマに、「絵本とは」「絵本の表現とは」をあらためて考えることのできる大会を目指しました。

大会にあわせて武蔵野美術大学キャンパス内で3つの展覧会「ムサビと絵本—絵本の表現」「現代のしかけ絵本」「ドゥシャン・カーライ作品展」を開催しましたのもそのためです。

大会参加者は、会員120名、一般96名、学生41名と教職員と学生による大会スタッフ40名を加えた297名でした。本来ですと大会校の学生に積極的に働きかけ、参加の機会を提供するものですが、使用した会場の収容定員を考慮してあまり周知しなかったことは申し訳なく思っています。また1日目の30日、JR中央線の大がかりな工事が重なり多少の混乱がありましたが、公表が数カ月前で一番焦ったのは大会実行委員会でした。それでも2日間の大会を大きな問題もなく無事終えることができたのは、理事の方々や発表者、関係者のご協力があったこそと心から感謝いたしております。

◎

6月30日(土)は、大会の開催に先立って絵本学会の公式プログラムではありませんが、10時40分から12時まで、「ム

「サビと絵本—絵本の表現」展に関連したアーティスト・トークを開催しました。長谷川集平さんを講師に展示されている自身の作品について語っていただき、12時から12時20分まで長谷川集平さんサイン会も行われました。

#### 大会第1日目

午後1時から開会式が行われ、佐々木宏子会長による開会宣言のあと、開催校を代表して甲田洋二武蔵野美術大学学長が挨拶、来賓としてWAVE代表和歌山静子さんが挨拶され、最後に自作『ひまわり』の朗読が行われました。

午後1時30分からは「絵本表現の方法論」をテーマに二つの記念講演が行われました。

最初の講演は、スロバキア在住の作家ドゥシャン・カーライさんによるもので、ご自身の作品を中心に豊富なスライドを基に表現の発想と方法について語っていただきました。カーライさんは、プラティスラバ国際絵本ビエンナーレグランプリの受賞や国際アンデルセン賞の受賞者として、日本では絵本作家として知られています。しかし、同時に開催された「ドゥシャン・カーライ作品展」では、絵本の他30点の版画作品も展示され、多彩な活動ぶりが伝わったのではないのでしょうか。

午後3時20分からは長谷川集平さんの講演が行われました。最初に20年近く続いている「お弁当絵本」に込められている考え方が語られましたが、指導している最近の学生作品を紹介しながらの話は、説得力があり「絵本とは人間の心に一番近い芸術形態のひとつ」という言葉が印象的でした。後半は、デビュー作『はせがわくんきらいや』にまつわるご自身のこと、表現に対する考え方、当時の絵本事情や出版について語られ、最後に最近作『ホームランを打ったことのない君に』が紹介されました。これまでのほぼ30年の活動を振り返りながらの講演は大変興味深いものになりました。

講演終了後絵本学会定期総会が行われ、午後6時過ぎから和やかな雰囲気のもと交流会が大学教職員食堂で行われました。およそ80人が参加し盛況な会となりましたが、長谷川集平さんによるギター演奏と歌が交流会一番の盛り上がりをもせたイベントになりました。



#### 大会第2日目

午前9時20分からA室とB室に分かれ、研究発表が行われました。A室は佐々木宏子さん、生田美秋さんが進行役を務め6つのテーマの発表が行われました。B室は、棚橋美代子さん、灰鳥かりさんが進行役を務め5つのテーマの発表が行われました。

昼食をはさんで午後1時からは7名の作品発表が行われました。A室は笹本純さんがB室は正木賢一さんが進行役を務め、ここ何年か定着した研究発表と同教室、同じ形式による方法でそれぞれの発表が行われました。原寸大の作品は

遠くからは少し見づらく、事前にデータをデジタル化するなど、発表方法は今後の課題かもしれません。

作品展示は、教室に壁面をつくるのが難しく、机に平置きする方法をとりました。見やすかったという意見があった一方で、壁面の展示を望む声もありました。空間の制約から壁面展示できなかつたことをお詫びいたします。作品の水準はここ数年確実に上がってきています。それぞれ見ごたえのある作品で、それだけに展示の方法で見え方も変わりますので、作品展示については申し訳なく思っております。

午後3時からラウンドテーブルが行われました。これまでは3つのテーマをおく事が慣例でしたが、あえて2つに絞り全体テーマ「絵本と表現」に関連づけるよう設定しました。

R1では、申明浩さんがコーディネータを務め「絵本教育の現場から」のテーマで筑波大学笹本純さん、京都造形芸術大学佐藤博一さん、武蔵野美術大学今井がそれぞれの大学で行っている絵本制作の考え方や授業の内容が紹介されました。絵本制作に関する授業が紹介されることも珍しい事ですが、それぞれ大学ごとに方法論が異なり興味深い内容になったのではないのでしょうか。

R2では、松岡希代子さんがコーディネータを小野田若葉さんが通訳を務め「絵本制作の現場から」のテーマでドゥシャン・カーライさんを囲みました。前日の講演を前提に参加者との質疑応答、交流に多くの時間が割られました。表現に対する考え方を直接作家から聞き出す機会はそうあるものではありませんので、貴重な時間になったと思います。具体的な内容を参加されなかった方にも報告しなければならなかったのですが、当日マイクを使用しなかったこととスライドプロジェクタのファンの音が声をかき消し、記録したのから再現することができませんでした。この場を借りてお詫びいたします。

ラウンドテーブル終了後閉会式が行われ、佐々木宏子会長の閉会宣言をもって第10回記念大会が閉会しました。



10周年の記念大会ということもあり、引き受けることにも躊躇しましたが、正直なところ準備は大変でした。大会の準備とともに展覧会の準備を同時に行ったことにもよるものですが、細かなところでは行き届かないところも多々ありましたが、無事終えたことにほっとしております。実行委員の皆さん、運営スタッフ、ボランティアの学生に心から感謝しております。

第11回大会は札幌の藤女子大学で開催されます。大会の更なる充実と絵本学会の発展を祈念いたします。

## 講演

### 絵本表現の方法(1)

講師：ドウシャン・カーライ

通訳：小野田若菜

#### ●ドウシャン・カーライ略歴

1948年、スロバキアのブラティスラヴァに生まれ、ブラティスラヴァ美術大学にて、絵画、版画、グラフィックデザイン、イラストレーション等を学ぶ。現在、同大学にて教授を務める。

作家として、エッチング手法を用いた版画や本の挿絵、油絵、アニメーションフィルム、切手のデザイン等、幅広い分野で活躍。極めて芸術性の高い、独特の表現性を持ち、スロバキア国内はもちろんのこと、ドイツ、フランスでもその名が知られている。

#### 絵本と芸術性

私が一生をかけて悩みぬいている問題があります。絵本、イラストレーションが、芸術になり得る瞬間とそうでなくなる瞬間の線引きはできるでしょうか。また、あったとして、それはどこなのでしょう。

絵本やイラストレーションは、人が巨匠の絵の前に立ち、絵から感動を受けるといったものと、同じような感動を与える瞬間があり、一方である線を越えると、ただの商品になってしまいます。その瞬間はどこなのでしょう。文学作品を扱っている際に、どこまでが自由でどこからが自由であってはいけないのかというのと同じようにです。

実際地球上で出版されている本を並べてみれば、地球が埋まってしまうのではないかとと思われるほど、膨大な数の書物があるにもかかわらず、私たちの身近にあって、感動を与え、残っていく本はごくわずかではないでしょうか。

それに、私たちが一生のうちに読破できる本というのは、限られています。詩が好きな人もいれば、ロマン書を好む人も、冒険ものを愛する人も、探偵ものをだけを読んで、一生を終える人もいます。

子どもだけが、ものを見て、あるいは触れて、美しいものだと感じる感動を許されるはずなのですが、大人はどうしても個人の判断により、見せてはならないもの、見せるべきものと、子どもをつくられた型にはめてしまいがちです。それによって子どもの美しいと感じる感動は、最初から型にはめられたものであることも多々あります。(このような障害を取り除けるように、) どの人にとってどの本が必要なのかを書いてある紙でもあればいいでしょうね、本は空気やパンとおなじくらい、私たちにとって、とても大切なものです。

そういう神秘的な道具があれば、紙の無駄と言うのもだいぶ節約できるでしょうし、本にかかる労力もだいぶ減るものですが、そんなことはただの夢物語に過ぎません。

本と言うのは不思議で、非常に多くの感動を与えてくれますが、それは作家が誠実な気持ちで、読者にメッセージが伝わるだろうかと不安にさいなまれながら、本と向き合い作り上げるものであるからです。ところがこの本は、自らの力でふさわしい読者に会うことが出来ませんから、読者がつぎ込んだ努力やメッセージが伝わらないこともあるのです。芸術にも同じようなことがおきます。すばらしい作品を作り上げたとしても、誰も関心を持ってくれずに無駄になってしまうことです。

しかし芸術作品と本の大きな差は、本は出版物である以上、未来永劫残るわけではありません。芸術作品ならば、倉庫に保管してコレクターが現れるまで待つことが出来ます。つまり本というのは、出版されてから、廃本になるま



でのわずかな期間に永劫を極めなければなりません。ですから、絵や彫刻よりも早く本は時代遅れになってしまい、寿命は尽きてしまい、出版が終われば中身は忘れ去られてしまうのです。しかしながら、例外の本もあります。100年や200年と時代ごとに伝えられて人類史ともなっている本です。

私も今まで多くの本に触れ、また挿絵を描いてきました。その多くはあらゆる言語に翻訳されましたが、その中には、すでに市場に出回っていないにもかかわらず、人々の間で語られているものがあります。その一方、忘れ去られている本もありますが、それら全ては私の子どものように愛情を注いで作ったものであり、私は大切に蔵書として保管しています。出版数が多かろうが少なかろうが、成功しようがしなかろうが、私の人生の一部となった物語がそこに積まれているのであり、私は等しくこの本たちを愛しているのです。

長くこの仕事を続けていますし、また人に仕事を教えてきましたが、成功する秘訣は何ですか？と聞かれても、残念ながらお答えすることはできません。もちろん、シェイクスピアやオスカー・ワイルド、ルイス・キャロル、アンデルセンといった作家の物語を借り、これに依存することも出来なくはないですが、彼らはすでに世界の作家となっていますから、一作家としてはあまり有効な手段とは言えません。

すばらしい文章力を備えた本であるのに挿絵が力不足である本は多くありますし、その逆に挿絵がすばらしいのに文章が駄作であったりする場合もあります。実際本を売買してくださる方の中には、それを専門職にしている人もいます。彼らは私たちの作った本をどのような場面や場所でふさわしいのかと分類をし、推薦の言葉をつけてしまいます。たとえばこの本は、幼児向けであるとか、低学年向けであるとか、このイラストレーターは冒険文学に挿絵をつけるとふさわしいと言ったような分類がされてしまうのです。

芸術祭などで、絵本の見本市と称する場所は、さまざまな絵本が並びますが、挿絵に誰のものとも分からない修正を加えられてしまった写真のようなもの、みな似たような絵柄ばかりだと印象を受けます。その見本市の目的が、どれだけの利益を得られるかに収束するあまり、利潤を求めだけの、お互いどれだけ多く売れるのかという心のうちが見え見えの表紙になってしまうのです。このような光景はキャバレーのようだと思います。キャバレーの女性たちの、できるだけ自分が美しく見えるようにと手足を伸ばしているイメージが、本もまたそのようにひしめき合っ

ているように見えてしまうからです。そうした中には、真に文学や芸術を愛する作家もいて、そのような人の作品は本屋の片隅に非常に控えめに添えられ、読者が彼らの良心に気がついてくれるのを待っているのです。

### 変身すること

私の友人が、イラストを描くと言うことは「変身」するということなのではないか、と言っていたことがあります。本に挿絵を描くというのは一日二日で出来上がるものではなく、数ヶ月、数年かかることもあります。その間に作家は「変身」を遂げなければならない。文章を生み出した作家と同一化する、ないしは読者、中でも子どもに同一化しなくてはならないのです。これが「変身」するということなのです。初めての本と対峙するのであろう子どもたちに「変身」する。そういう過程とはとても楽しいものです。

私がさきほど、本というのはどこまで自由が許されるのかという疑問を投げかけましたが、そのひとつの答えとして本による解釈の部分、作家や子どもにどこまで同一化できるのかというところにあるのではないのでしょうか。

さて、イラストレーターの自由はどこにあるのかというのは、文章の中にある物語をどれだけ視覚的表現で豊かにできるか、絵本の中で文章と対極にある力をどれだけ発揮できるか、その瞬間に現れるものであると思います。いうならば、読者が絵本を手にしたとき、この挿絵がなかったらこの物語は一体どうなっていたのだろうか、全く想像がつかないと思わせることができればいいのです。

しかしながら絵本というのは、イラストだけで成り立っているわけではありません。そこには活字であったり、装丁であったりあらゆる要素が組み合わさっているのです。総合的に見なければいけません。

イラストレーターの挿絵の描き方として、作家は自由を徹底的に追求するという方法、物語の状況をそのまま模倣するようにイラストを描くのに徹するという方法のふたつがあります。後者は自由がないように思えますが、そのどちらであっても、実は作家の自由は存在するのです。

文学作品は個人や時代によって全く異なった影響を人にあたえます。5歳のときに読んだ印象と18歳のときに読んだ印象はきっと同じではないでしょう。詩の本を読むとき、自室の暗がりを読む人もいれば、電車の中で読みたがる人もいるように。

ルイス・キャロルの引用ですが「世界と言うのは、実際目に見えている姿とはまるで違う姿をしている。」ということばがあります。イラストレーションでも、まさにその言葉があてはまるのではないのでしょうか。イラストレーシ

ョンが芸術作品となりうるのかどうかという問いに対してのひとつの答えになるのではないのでしょうか。

水彩や油彩やアニメーション、絵本、切手、ワインのラベルに至るまであらゆるグラフィックを扱ってきましたが、まるで違う国を旅するように、メディアを変えて表現する楽しみというのは尽きません。できるだけ違う表現にこれからも挑戦したいですし、以前試した構図や内容にならないように心がけています。

#### アンデルセン全集への思い

私の人生をかける作品として、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの挿絵があります。1988年に国際アンデルセン賞を受賞したとき、歴代受賞の中でも私は一番若かったのです。私は持っている可能な限りの技術で尽力しましたから、賞の後、これからどうしようと思いました。とっとと賞のことは忘れて次の仕事を始めるべきだ、とも思いました。実際授賞式前夜に、オスロでとても美しい年配の女性（リンドグレン婦人）に、「アンデルセンのイラストを手がけたことがありますか？」と聞かれました。答えは「ノー」でした。

私は幼少の頃よりアンデルセン童話に親しんできていたにもかかわらず、アンデルセンのイラストを描いたことがなかったのです。そこからアンデルセンの挿絵を描きたいと願ひ続け、描き終えるという夢が叶うまで、実に13年掛かりました。ブリオ社からアンデルセン全集の挿絵をつけてみないか、という話が持ち上がったとき非常に嬉しかったものです。出版社のほうから、できるだけ多様性のある挿絵を、と要望されていたので、私は妻のカミィラとともに挿絵を描くことに決めました。実は夫婦で同じ仕事をしたことがなかったので、この体験は非常に面白いものでした。それに、挿絵画家が二人で共同の挿絵を描くと言うことは稀なことなのではないのでしょうか。一方で、二人で仕事をするということは理になかったことでもあったのです。なにしろ1200ページ全てに挿絵を描くというのはあまりに膨大だからです。挿絵の原案を描いては二人分を壁に張り、ひとつの作品として一貫性があるかどうか、時には順番を変えていつも話しあっていましたが、ほとんど息が合っていました。

初めは1200ページが1冊の本ということでしたが、製本が技術的に不可能でしたから、それを3冊に分割することになりました。1冊が600ページになって、結果的に私たちがやらねばならない仕事量が増えてしまいました。

アンデルセン童話の中で一番美しくてすばらしい物語の多くは、彼が若いときに作り上げました。そうすると、年

代順に掲載される予定でしたから、3冊の本の中で差が生まれてしまいます。これを解消するために出版社のほうと話し合い、興味深い作品を3冊に同じ割合で入れることにしました。

アンデルセンは非常に興味深い人物です。社会的にも宗教的なことにしても、自分の時代を振り返ったときにどのような巨匠がいたのか、また彼が活躍していた当時の状況を、彼自身非常に鋭い洞察を持って分析していた人でした。彼の物語の中には、そうして生きてきた彼の悩みやアイデアがすべて現れています。ひとつの物語の中で、彼の名前が「アンデルセン」の「セン」で終わっていることに、非常に困惑し悲しんでいたと言います。それはデンマークには同じような名前を持つ人が多いからです。別の物語では、彼の架空の愛人であるオペラ歌手とともにイタリアに旅をしています。このようなアンデルセンの非常に多岐に渡る側面を、すべて絵に表して、はじめて彼という人間の本质が見えてくるのです。

基本的にアンデルセンは物語を子ども向けに書きました。しかし一方でアンデルセンが生きてきた中で持った夢を、大人に向けて伝えているのではないかと思うのです。

4年もの間、アンデルセンは私たちの家を占拠していました。手間の掛かる客人であり、手間の掛からない客人でもあったのです。彼には食事も出さなくていいですし、ベッドメイキングも必要ありません。テレビを占拠される心配もアパートまで超距離電話をかけられる心配もありませんでしたが、そのかわりに彼は常に我が家にいました。彼とは昼食をともにし、夕食をともにし、一緒に寝て、起きると、さて小さなアイダほどのような姿になったのか、煙突掃除人はどのような姿なのか、と私たちは考えぬかなければなりませんでした。

ですから私たちはアンデルセン学の専門化になりました。私たちの人生のある一時期が彼とともにあったということはとても幸せなことでした。そして再びオスロのカフェの中で、あの美しい年配の女性（リンドグレン婦人）に再会したとき、私の小さな夢がいつの間にか大きくなって実現したのだと感じ、非常に大きな満足を感じました。本当に彼女のおかげで、私と妻のカミィラの4年間で忘れられないものとなったのです。

絵本作家というのは、自分の作業が終わったあと何ヶ月も待って、ようやく自分の描いた挿絵が本となってくるので非常にやきもきするものです。まるで自分のこどもか孫が生まれるのを待つかのような気持ちです。

（記述：中牧まどか）

## 講演

### 絵本表現の方法(2)

講師：長谷川集平

#### ●長谷川集平略歴

1955年兵庫県生まれ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科中退後、絵本作家として本格的に活動する。現在、作家として活動するかたわら、京都造形芸術大学にて客員教授も務める。

代表的な作品に、『はせがわくんきらいや』、『プレゼント』、『トリガラス』、最近作『ホームランを打ったことのない君に』などがある。絵本作り指導書、絵本のモンタージュ論を追及した『絵本づくりトレーニング』、『絵本づくりサブミッション』は、現在でも絵本づくりのバイブル的存在。

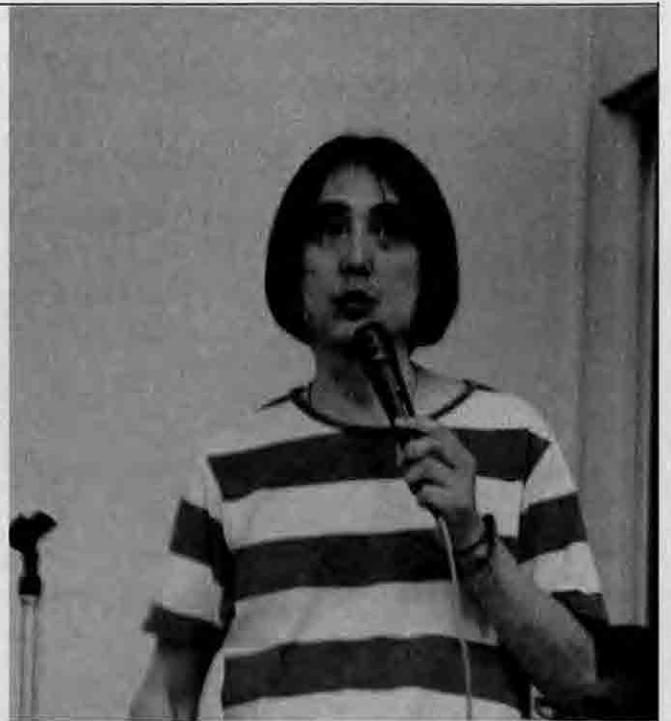
#### お弁当絵本

早野凡平の「帽子芸」と絵本は通ずるところがあるのではないかとあって、「帽子芸」を絵本でやってみたことがありました。絵本トレーニングの中でも紹介しています、「お弁当絵本」と題しています。

僕の絵本作家全盛期は70年代後半で、その後80年代の10年間は映画評論を書き、絵本づくりの指導を池袋でやっていました。武蔵野美術大学に通ったのは、1年程度でしたが、この10年で独学ながら、もう一度大学の勉強をしたという印象を持っています。映画雑誌のレビューを書くことなどは、いい加減なことは書けませんし、この仕事のおかげでかなり物事に関する考え方が変わったのではないかと考えています。ものを見る目がプライベートなものから普遍的なものへと変わっていった時間ではなかったのかと。作品のほうは目からうろこが落ちるといことはなかったのですが、最近トンネルから抜け出せたような気がします。

「お弁当絵本」の詳しい作り方は「絵本作りトレーニング」を読んでいただくのがいいのですが、簡単に言うと誰にでも32ページの絵本が作れる、というものです。白い画面に大きさを3センチと決めた黒いマルを描きます。ページをめくるごとに、大きさを変えたり数を増やしたりしながら、色々なパターンを自分なりに展開しながら描いていくのです。そしてその画面をみながら、文章を加えていきます。

この試みは、絵本講座から生まれたもので、もう20年近く続けています。その間、老若男女問わずありとあらゆる人たちに作ってもらいましたが、すばらしい名作がいくつ



も生まれます。よく、自分は絵が描けないから絵本が作れないと言う人がいますが、これなら誰にだって描けます。ロールシャッハテストのように、ほぼ偶然にできた白と黒の画面にことばを与えていくと、単なる黒マルの変化が同じものであったとしても、人によって全く違う物語が出てきます。それは普段は表面に出てこない、隠れたその人個人の物語なのでしょう。こどもの心身症を治療する箱庭療法というものがあります。有名な治療法で、抑圧されたコンプレックスやストレスが箱庭の中で表現されることで、こどもの心身症が回復に向かうのですが、この「お弁当絵本」が箱庭療法代わりに静岡のある場所で治療に使われているようです。箱庭療法は神経症には有効ですが、分裂病(統合失調症)には有効ではないのです。そもそも分裂病の治療に有効な手段はあまりない、と言われていました。しかし、その患者さんと絵本を作ることで、病気が改善されていくことがあるようです。

これはおそらく、神経症の患者であっても分裂病の患者であっても、最も欠落していて、渴望しているのはその人の物語だからです。「私」や「あなた」といった、これまでの物語を構築することができないために、心がばらばらになってしまう。そのばらばらの心をくっつける接着剤の役割を果たすのが物語であると、同じようなことをフロイトの精神分析でも言っています。フロイトは、その人の過去に戻っていき、幼児体験、いわゆるトラウマをたどって、その人の物語を再構成していくことで、病気を治療できると考えていました。それに近い効用が絵本にあるのではないかと、静岡の精神医学の先生は仰っていました。その先生

は、絵本づくりによって心の病気を治していくという研究をずっとされている方ですが、話を聞きながら僕が一番思ったことは、絵本とは人の心の姿にとってもよく似ている、ということでした。人の心はページをめくっていくように、過去をたどっていき、また過去の特定の物語を語っていく。一連のアナログのように繋がっているのではなくて、僕たちが思い出すのは、断片的なシーンの連なりですよね。そうした記憶をモンタージュしながら我々は過去を形成しているのではないのでしょうか。

絵本とは何かと色々と言われますが、僕はおそらく、絵本とは人間の心に一番近い芸術形態のひとつなのではないかと思っています。このことを考えると同時に音楽も外せないのですが、一枚の絵よりも文章よりも、絵本の形をとることで、人の心に一番近く深いところまで届くのではないか、という気がします。

(ここで参考作品の紹介を3点ほど)

この試みは何度やってもやめられない僕の趣味みたいなものでして、本当にいろんな人がいろんな物語を見せてくれる。その人の心が絵本となって出てくる。

僕がこういうことをやるような一番のきっかけは『はせがわくんきらいや』を描いたことです。出版当時は、子どもが描いたような素朴な表現と言われていましたが、僕自身は絵本とはこういうものなのかなと、さぐりながら描いていたような気がします。というのは僕の叔父が浦山桐郎という映画監督で、僕が小さい頃から映画づくりの話を、こどもには分からないような話を酔っ払いながらして帰って行くのですが、耳でお経を覚えるように頭に入っていて、中学生ごろになると画面の展開を覚え始めました。当時は絵本ブームでしたし、この大学に入学したのが1975年で、その頃は田島征三、長新太、和田誠、といった人たちがおそらく生涯で最もいい仕事をしていた時代だったのではないかと思います。『月刊絵本』という1973年から79年まで出た絵本研究誌が、絵本ブームの思想的な根拠になっていたと思います。『はせがわくんきらいや』がその雑誌で評価され、僕は大学を辞めたのですけど。

『月刊絵本』は70年代の雑誌です。70年代は、風俗のことも含めて劣化して80年代はあっという間に記憶喪失みたいになって、70年代にあれだけ騒がれていた絵本もなかったことになってしまいました。それで太田大八さんが80年代後半に、なにか絵本雑誌を作ろうということになって90年に創刊されたのが『Pee Boo』です。これがきっかけになって絵本学会が生まれて10年になります。僕にとって「月

刊絵本]でやってきたことが僕自身に基礎になっていますし、学会の基礎になって欲しいと思っています。『月刊絵本』はもう忘れられた雑誌ですが、読み直してみると、絵本の問題にしていることの鍵になることがたくさんありますし、秘密が込められています。僕たちはそれを宝探しのように探っていけばいいのではないかと思います。80年代になってそういうことが忘れられても、僕はひとり70年代やっていたりしました。

### 『はせがわくんきらいや』

せっかくなので『はせがわくんきらいや』を紹介します。この絵本の背景になったのは、昭和30年の「森永ヒ素ミルク事件」でした。僕はこのヒ素ミルクを3缶飲みましたが、悪運強くというのか、今も生きていますが、僕より少ない量を飲んで亡くなった人もたくさんいました。最近当時の映像を見つけましたが、僕も自身のことはよく分かっていませんでした。最近も食肉の偽造とか薬害とか、今もずっと変わらず起きています。この事件のヒ素は機械の洗浄用に使われていましたが、それがうっかりミルクに入ってしまったという、工場側の完全なミスでした。僕は死に損ねて後は余生みたいなのもりに考えていますし、死んでいった人たちの代弁者になっていかなきゃと思っています。それに、この事件以降、僕はブランド趣味とか全然信用できなくなりました。森永粉ミルクは当時高かったし上等でしたし、イメージもよかった。でもこの森永が売った大量のミルクの中にヒ素が入っていたという、こういう話は今でも続いています。だから、僕たちはどこに立ってどう判断しなくちゃいけないのかと、生活の瞬間、瞬間に考えなくちゃいけないと思います。

見返しの絵は、アンディ・ウォーホルのキャンベル缶に影響を受けつつ、死んでいった人たちのお地蔵さんを描くつもりで、哺乳瓶を描きました。この絵本が僕の人生を決定付けたのは間違いないと思います。この絵本だけ見るとあまりテクニックを使っていないように見えますが、僕が今この本を見返すと、結構スゴイです。まず時間がぼんぼん飛んでいますし、はじめから「この前なんか」と言っていますが、今はいつなのか。山へ遠足に行った時間と、日記の絵をはさみながら、幼稚園の時間にジャンプしていますし、次のページも日時が違ってきます。小学生になったときから、シーンごとになっています。

『絵本モンタージュ論』をやったときに、松本猛さんの受け売りなのですが、「場面」と「画面」を使い分けようと思いました。見開きひとつを「一場面」といってしまいがちですが、僕の場合ではひとつの「場面」を何画面も語っていく

ことがあります。映画的といわれますが、モンタージュを応用しています。

背景が白のページを引き立たせるために、黒い画面が2ページ続いて、はせがわくんが赤ちゃんの時に時間がまたジャンプしています。

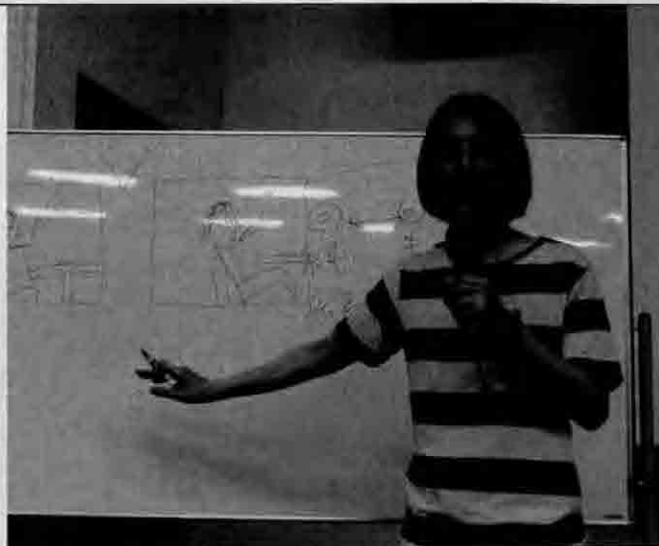
こんな絵本でもかなりのテクニックが使われていますが、このときは初めて絵本を描きましたし、描いていくうちにこういうことかと模索しながら描いていたのは確かです。絵本作家の先生に、絵本というのは、それぞれみんな描いていますが、絵本作家ならこれは知っておかないといけないという決まりごとみたいなものはないのですかと聞いたら、殆どの人はないと言います。ただ一人だけ、『月刊絵本』の絵本の見方、作り方という本をまとめた若山憲さんだけは違うことを言っていました。

### 絵本と表現

今絵本を研究する人の中には、動物絵本とか幼児絵本とか昔話絵本といったように分類することが多いですが、じゃあ絵本とは何かということの本質的に探ろうと考える人は、実際絵本を描いている人でさえ少ないと思います。若山さんは、デザインの仕事をしていたこともあって、絵本を視覚芸術として捉えようとしていました。僕が在学中に在籍していた学科が、視覚伝達デザイン学科だったので、若山さんが視覚表現ということばが使われたときにピンとききました。若山さんが言うには、絵本と言うのは2種類あって、ひとつは物語絵本、もうひとつは純絵本。便宜上、こういう言い方をしているけど、大抵の絵本はこのふたつの間にある、と言います。

物語絵本の場合は、絵が主に挿絵の役割を果たしている。つまり文章によって物語が進行しているところに、適切な絵をはめていく。挿絵が消極的な場合もありますが、もっと積極的に関わって物語に割り込んでくることもありますから、一概にスタティックな絵本とも言えませんが。

純絵本の場合は極端に言えば、全くことばは必要ない、



と若山さんは言います。絵の展開だけで絵本が成り立つ。一番純粋な絵本は、めくる効果によって物語が視覚的に展開するというわけです。だいたい殆どの絵本はこの狭間にあるのではないかと仰っていました。

一度、ことばのない純絵本を描いたことがありましたが、これは表現の幅が限られてくる。ことばが絵本の中で果たす役割を軽視するとよくないと思いました。さきほどの「お弁当絵本」でも、ただの黒マルの連続だけだと、どうにでも見えるわけですが、そこにことばをあたえることによって物語が始まります。『あおくんときいろちゃん』のように、ことばで定義して絵を語っていくのも必要になっていくことと思います。

松本猛さんが東京芸大の卒業論文で書いたものですが、『絵本モンタージュ論』の考え方に、僕は興味を持って『月刊絵本』で僕と一緒にさらにもっと詳しく追及していました。これらがのちに「絵本論」として出ました。絵本の理論編として完成された本です。実践編は『絵本づくりトレーニング』ですが。

こういったことを考えはじめていた時期に描いた絵本が、『トリゴラス』です。1979年に、絵本ブームだったこともあってNHK教育テレビで、若い絵本作家を集めて特集していたときに、僕も取り上げられました。このときに、火野正平さんが『トリゴラス』を朗読してくれたのですが、とてもかっこよかったです。よく読み聞かせを見ていて、あれなら僕のほうが上手だということはよくあるのですが、これには参りました。火野さんの危ない感じがびったり。

今でも映画から学ぶことは尽きません。これは絵本に利用できるかな、と考えながら映画を見えています。

やっぱり常識をどうやって裏切るかと言うことがあるのですね。映画マニアの密かな楽しみにスクリプトミスを見

## 研究発表

■A室 進行：佐々木宏子・生田美秋

●ましませつこの作品に見る伝承世界の軌跡

ーわらべうたとこぐま社との出会いー

廣田真智子・中川亜沙美・西脇由利子・丸尾美保・

万本光恵・渡辺万由美（こぐま社絵本研究会）

ましませつこは『わらべうた』（こどものとも117号1965福音館書店）で商業デザイン界から絵本の世界に登場し、伝承としてのわらべうたの絵本表現に新境地を拓いた。同時期にはグラフィックデザイナーの旗手、亀倉雄策が日本のデザインについて「伝統を一度分解して、新しく組み立て」、「KATAT Iの世界性、KATAT Iの風土性」（『亀倉雄策 亀倉雄策 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ 2006』）を唱え、1951年に日本宣伝美術会を設立していた。ましませつこもそこに所属していた。

処女作『わらべうた』を描いた個人的な動機は、学生時代に帰郷した折、山形・鶴岡で再認識した「わらべうた」のメロディーや蔵の中にしまわれていたこども時代の着物の柄や色彩にみた美しさの再発見がある。（『わたしの絵本とわらべうたへの想い』ましませつこ講演・高槻市・2006）そのイメージで描きためていた一連の絵が松居直によって絵本となった。「わらべうた」採集や研究、またわらべうた運動が盛んになったこの時期には「わらべうた」絵本が出版されだした頃であるが、これら従来のわらべうたの絵本のイメージをくつがえす新しさがこの絵本にはあった。伝承の「わらべうた」と日本の着物や亀倉が賞賛するシンプルで象徴的な美しさを持つ紋や文様を駆使し、のびやかでソフトな平面フォルムのデザインで美しい色彩のわらべうた絵本を展開した。

ましませつこはこの福音館の『わらべうた』絵本を出発点に、子ども時代を回顧した創作絵本、またコンスタントに取り組んだ伝承・行事絵本、そしてことば遊びや詩の絵本など試行錯誤の時期を経て、再び現在はこぐま社で「わらべうたえほん」に挑戦している。それらに表現された伝承世界と子どもの世界、そしてこぐま社と絵本づくりの関係を表現技法や絵本創作への視点をさぐりながら彼女の絵本表現の変遷を分析する。

●絵本「めっきらもっきら どおんどん」における身体感覚の表現について

加藤純子（名古屋芸術大学人間発達学部教授）

多くの絵本は、一つの画面の中に絵と文章という異なっ

つけることがあります。例えば、ある女が喫茶店でタバコを吸って、彼氏を待っている。いっぺん暗転する。そして同じ女が、まだかなあという感じでちょっと仰け反って待っていて、タバコが短くなっている。こうやって時間の経過を表すわけです。だから我々はこの暗転した間に時間の経過が分かるわけです。

ところが、スイスのアラン・タネールという曲者がおりまして、イギリスで映画を勉強した人で、非常に斬新なモンタージュをする人です。これが逆で、最初のタバコが短い、後のタバコが長い画面になっています。映画の普通の常識として考えて、スクリプトミスだと思うわけです。こういうミスは日本映画で多いのですが、撮影が別々ですから、タバコの長さをチェックしていなかったのだと思うのです。ところがこのシーンの後に、灰皿が写されて、灰皿にタバコがいっぱい入っている。だからこの人は何本もタバコを吸って新しいタバコに火をつけて吸っていたのだと分かります。この暗転の間に起こったことは、我々が考えていたことをはるかに飛び越えてしまった。

こういうのを絵本でやりたいと思うのです。ひまわりの絵本でも、どんどん大きくなって花が咲いて種になってもいいけれど、途中で成長が止まって、逆成長しても面白い。実はそこで数年も経っていた、とか。早野凡平の「帽子芸」ではないですが、読んでニヤっとするような、そればかりでは駄目ですが、芯の部分はしっかりしていて、その上に遊びがあって何度読んでもここは笑ってしまうという、プロの芸にしておきたいというのを大切にしたいのです。

『ホームランを打ったことのない君に』

最後に『ホームランを打ったことのない君に』を紹介して終わりにします。これは、一昨年に描いて、それまでに8年間くらいブランクがあったのですが、最近またやる気になって描きました。これはマックでペインターというソフトを使って描きました。久々の絵本を描くチャンスで、最初ダメーを見てもらった出版社が恐れをなして出版中止になったのを、理論社の方の協力を得てやっと出版されることになりました。だから僕が描いても、すぐに出版されるわけではないのです。色んな人の協力と恩義を受けながら出版されるわけですが、やっぱり絵本づくりで僕が好きなのは、一人で絵を描いて完結するわけではなくて、人間関係で作られる、この場合は、編集長、デザインをやってくれた方と、理論社の営業の方にも、お世話になりました。チームワークでいいものが出来上がっていくのは映画にも通じていて、素敵だなあと思います。

（記述：中牧まどか）

た手法による表現を共存させている。それらは互いに補いあいながら、あるいは相乗的に表現効果を高めあいながら、読み手がお話の世界を頭の中に描くことができるように、読み手の想像力に働きかける。「絵本を読む」ということは、画面に直接描かれていることを手がかりとして、画面に直接かかれていない事柄まで想像し、迫真性をもって描いていくことなのだ。

絵本「めっきらもっきら どおんどん」(長谷川摂子文 降矢なな 絵 福音館書店)は、遊ぶ相手が見つからなくて手持ち無沙汰な男の子が、口からでませの意味のない言葉に節をつけて歌ったことをきっかけとして大木の下にある異界で3人のばけものたちと楽しく遊んだ後、ばけものたちが眠ってしまってふと心細さを感じ、彼らの制止を振り切って地上に戻ってくる話である。

この絵本の文章は、散文と言葉のリズムを強調した文の2種類で書かれている。また、言葉のリズムを強調した文には、明らかに登場人物が実際に声に出して歌っていると判断できるものと、登場人物の気持ちを第三者が代弁しているのではないかと思われるものの2種類がある。

本研究では、言葉のリズムを強調した文のうち後者の文が書かれている画面に着目し、子どもの遊び歌のリズムや、絵の構図を手がかりとして以下の2点を明らかにする。

1)言葉のリズムを強調した文と、その文が書かれている画面の絵の両方を併せて読むことによって読み手が描くことができるイメージは、周期運動によって興奮状態にある身体感覚であること

2)登場人物の身体感覚に同期しやすい言葉と絵の組み合わせによって、読み手は、画面内の出来事を迫真性をもって描くことができるということ

#### ●「絵本」を主軸にした異学科学生・教員の協働活動による実践教育に関して(1)―父親の育児参加支援のためのものづくりワークショップから―

谷出千代子・山下明美(仁愛女子短期大学教授・准教授)

1. 問題の所在 平成17年4月から「次世代育成支援対策推進法」に基づいて、市町村・都道府県の行動計画、一般事業主・特定事業主行動計画の策定を義務付けた行動計画の実施となった。本研究では、県・市町村や事業主の行動計画を具体化するにあたり、実質的な対象となる父親がいかに関心を示し、行動できるかというねらいに立脚し実践を試みた。特に、本学の学科専門性を生かしながら「絵本」を共通キーワードに、四専門分野(デザイン・情報教育・幼児教育・音楽)の教員と学生が、地域の子育て中の父親を対象に、積極的育児参加を導くための

「ものづくりの研究と指導実践」を試みた。

まず第1観点として、1)「絵本」をキーワードにしたワークショップに興味を示し参加した父親像、及び2)ワークショップを積極的に支援した学生の絵本に対する姿勢はどのように位置づけられるかについて検討していこうと思う。

2. 結果 1)当ワークショップ参加の有無からみた父親の「育児」に対する行動や考え方で差があった例として、年齢的に30代前半の父親で、子ども数が少ない、帰宅時間等が割合早く時間的にゆとりがあり、絵本の読み聞かせや入浴の援助なども積極的であるのが、参加したグループである。すなわち一人目の子どもの育児を目の当たりにして、育児参加の手段を希求している姿勢が見られた。ワークショップに2回以上参加した父親の「育児姿勢の変化」は、「絵本の読み聞かせ・手近な30分以内の声かけ相手をする」ことなどに改変の兆しがあった。そして具体的な要望、遊ばせ方、読み聞かせ絵本の選択などの要求が高かった。育児に取組み、具体的手段の欠落に気付く父親像があった。2)学生の専門的・体験的のものづくりの育児支援に対する役割等は発表時に示す。

#### ●「文字なし絵本」における人称について

駒田賢一(聖和大学大学院博士後期課程)

通常、絵本は地の文において何らかの人称を設定して物語を展開させている。『大辞林』によれば、人称とは文法上の区別のひとつで、一人称(自称)・二人称(対称)・三人称(他称)に分けられる。物語との関係でいえば、一人称では発信者が物語の当事者であり、二人称では直接的関係の他者であり、また三人称では間接的に全体を把握し得る存在である。物語の発信源として人称のもつ効果は大きく、読み手に物語への特定の視点を提供するために、そのまま物語解釈の基礎となる可能性は非常に高い。したがって人称の統一は、物語展開を安定させることにも繋がる。

上述のように、物語の視点と文による人称表現とは緊密な関係にある。しかしながら、絵本には文字なし絵本といわれる、文字がまったく、あるいはほとんどない絵本も存在する。当然であるが、これら「文字なし絵本」には文による人称設定がない。絵では視点や視線が文法という人称表現的機能は果たすものの、明確に対象を限定する文のそれとは全く同じ性格のものではない。『かさ』のようにかなり主人公を特定している作品であっても、主人公への視線以外に焦点を合わせることは不可能ではない。また『やこうれっしゃ』など複数の対象が同時に描かれる作品では、それが一層顕著になる。読み手が自分に見合った視点から考える事ができ、それぞれの経験や思考に合わせて物語を

想像する。こうした物語解釈の多様性は、「文字なし絵本」の大きな特徴である。ただし「文字なし絵本」でも、人称と同等に物語の発信源となり得る視点を設定していなければ、読み手は物語を読み進めることはできないだろう。では「文字なし絵本」を読み進める際に、どのような人称、あるいは物語展開の視点が設定されているのか。

本発表では、いくつかの作品分析と読みの事例を併せて、この「文字なし絵本」における人称の問題について考察を行いたい。

●絵本における“行きて帰りし”物語構造に関する研究  
—エッツ『もりのなか』、『わたしとあそんで』の考察—  
生駒幸子（聖和大学大学院研究員）

絵本は絵と言葉とで構築される総合芸術であり、時代、空間、文化を越えて様々な年代の人々に訴えかける力を持つ、可能性に満ちた表現メディアである。読者が幼い子どもである場合、文字を読み書きしない子どもでさえ、読み聞かせを通し、目で絵を見て、耳からお話を聞くことによって、まさに絵本を「体験」している。では、絵本を体験するという事は、幼い子どもたちにとってどのような意味をもたらすのであろうか。

瀬田貞二氏は、幼い子どもの発達しようとする頭脳や感情に働きに即した、いちばん受け入れやすい形のお話に、「行って帰ってくる (there and back again)」構造があると指摘した（『幼い子の文学』1980）。子どもの日々の生活をみていると分かるように、子どもは現実の世界で、実際に身体を動かして「行って帰ってくる」体験を重ねて成長していく。それと同時に、子どもたちは、絵本やお話などの想像の世界で、この「行って帰ってくる」体験もしていると思われる。すぐれた作家・画家の本質を見極める眼によって、研ぎ澄まされて絵本という物語がうまれるのだが、子どもは、絵本のなかに、「いま、ここ」にある現実世界の文脈が昇華されたものとしての、“行きて帰りし”物語を見出しているのではないか。この“行きて帰りし”絵本の体験は、子どもたちが日々の生活をしながら、自分自身の物語をつむぎだしていることと密接につながっていると考えられる。

本発表では、このような想像世界における子どもの「行って帰ってくる」体験をシンプルに、かつ具体的に描いていると思われる、マリー・ホール・エッツの『もりのなか』、『わたしとあそんで』の2冊を検証することを試みる。さらに、物語における“行きて帰りし”という構造を、瀬田氏の論説から最大限に導き出しながら、絵本における“行きて帰りし”物語構造の特徴、またその構造を持つ絵本と子どもとの関係性を明らかにし、乳幼児期の子どもの発達に

ふさわしい絵本の質の問題にまで言及したいと思う。

●絵雑誌「コドモノクニ」にみる子ども像  
柴村紀代（藤女子大学教授）

「コドモノクニ」は、1922年1月から1944年3月まで全285冊が発刊された。戦前を代表する芸術的絵雑誌として、岡本帰一、初山滋、本田庄太郎、清水良雄、川上四郎など後の絵本に大きな影響を与えた画家がここを舞台として活躍した。従来の研究は個々の作家を取り上げたものが多いが、今回の発表はこれらの画家たちのそれぞれの特徴ではなく、誌面に描かれた子ども像が時代をどのように映しているかについて考察したい。

その方法として、誌面に描かれた子どもの遊びと仕事を中心に分析する。そこに、編集顧問であった倉橋惣三の生活を重視する保育理論の影響や、大正デモクラシーの時代背景がどのように誌面に反映されたかを検討したい。

なお、今回参照した「コドモノクニ」は、2005年函館市中央図書館が移転に伴い一部研究者に公開した「函館図書館児童雑誌コレクション」の中から、「コドモノクニ」129冊を対象とした。

北海道内での「コドモノクニ」の所蔵は、現在までほとんど確認されず、函館市中央図書館での所蔵が、今回初めて道内でまとまった量の資料として日の目を見ることとなった。

函館市中央図書館の所蔵内容は下記の通りである。

2巻8号（1923年8月）—16巻2号（1937年2月）（欠号あり）

今回の函館図書館所蔵の当資料を通して得た特徴を、今後の課題として、残りのコドモノクニについても検討したいと思っている。

■B室 進行：棚橋美代子・灰鳥かり

●「溶解体験を絵本で」

—スズキコージ・片山健『やまのかいしゃ』から—  
神戸洋子

（白百合女子大学大学院児童文学専攻博士課程3年）

『やまのかいしゃ』は主人公が「ほげたさん」という会社員をしている大人である。そして「ほげたさん」は、山にいったまま帰って来ない。「いまでもやまのちょうじょうでげんきにやっています」と本文の最後にあるが、この文章は表紙絵で表現されている。

主人公が子どもではないこと、絵本に多く描かれる「行って帰る」型をはずしていることなど『やまのかいしゃ』は独自の絵本世界を持っているが、それ以上に『やまのかいしゃ』が独自に描くのは「溶解体験」である。

矢野智司はバタイユの「非一知」、作田啓一の「溶解体

験」などの概念を援用しつつ「逆擬人化」という発想を導き出す。矢野智司は「動物絵本は、擬人法と逆擬人法によって作成されている」とし、「この擬人法とは、本来は不透過で理解不能な他者である動物を、人間の秩序のうちに回収しようとする生の技法である。」と、バタイユの「生の自在さへの回復」を「生の技法」を紹介するが、「生の技法」を推し進めて行くと「自己と世界とを隔てる境界がいつのまにか溶解してしまう」。「生の技法」「溶解体験」は「逆擬人化」によって説明できる。

『おなかのすくさんば』の主人公の男の子はどろんこの池の中で動物たちに交じって咆哮する。動物性を否定した人間社会から、再度の否定によって動物の世界、遊びの世界へ引き込まれて行く形で「逆擬人法」が描かれ、大人にあっては会社へ通勤する日常は「動物性の否定」であるが、会社に遅刻するほどの寝坊をした上、逆方向行きの電車に乗り込んでしまった「ほげたさん」は終着駅「やまのあなた」の駅員に時計をあげてしまい、時間の枠に縛られた大人社会からの離脱を図る。ここに「逆擬人法」が見られる。

「動物性を否定することによって人間化するプロセスへの企て」は『発達としての教育』と呼ばれるのに対して、『否定の否定』つまり、有用な生の在り方を否定して至高性を回復する体験を『生成としての教育』と名づける。』のであるが、この有用性の否定は動物世界への溶解体験を起こす。こうして逆擬人法は内奥性の次元を開くのである。

「ほげたさん」の呼びかけに応じてやってくる社長以下会社の人々は山頂でまさに蕩尽を繰り広げるのであるが「やまのかいしゃがぜんぜんもうからない」という「有用なあり方」からの視点に立ち返り、山を降りてしまう。

ここに残る「ほげたさん」は、決して今流行のスローライフを送っているわけではない。宮澤賢治が『なめとこ山の熊』の三十郎を熊の中に置いたように、「いまでもやまのちょうじょうでげんきにやっています」という形で「逆擬人化」されたのである。擬人法に対して逆擬人法は、人間のほうが世界化、脱人間化され、自己と世界の境界が溶解するため、多数多様な視点を持ち得ることを我々読者に伝えてくれるのである。

#### ●読者を能動的な読みへと誘う絵本の仕掛け

今田由香（日本女子大学児童文学研究 日月会  
／星美学園短期大学非常勤講師）

絵本は多様な読みの発生を期待した構造をもつところに、その特長があるのではないだろうか。作者によって産出された絵本それ自体は、モノとして失われぬかぎ

り、変わらずに存在する。だが、作品の内部に秘められた読みの可能性は計り知れない。読者の成長やおかれた環境の変化によっては、開くたびに違う絵本経験がなされることもあるだろう。また、他者との読みの交換を通じて新しい視座を獲得したとき、絵本が読者にこれまでと違う姿を現すこともある。

昨年より、筆者は絵本の記憶についての調査を始めた。そのなかで、絵本の思い出を長く保持しているひが多いことを知り、だが、その内容はというと、絵本がはつきりとは語っていないものを含むことがあることに気がついた。長く保持される絵本の記憶には、読者の創造的な読書の痕跡があるように思える。調査のなかで筆者がみつけた課題は、読者を創造的で能動的な読みへと誘う絵本の仕掛けの分析である。多様で独創的な受容を可能にする絵本の内的要因を指し示し、絵本においてそれがどのように構造化されているのかを明らかにすることを現在筆者は目指している。つまり、絵本の受容から作用を検討し、絵本の仕掛け構造について調べることで、読者を創造的な読書活動に誘う仕組みを明らかにしようと試みている。

本発表はその中間報告である。表象や表出など読者の能動的な行為を誘う絵本の仕掛けには、ことばと絵のコンビネーション、展開のリズム、明確な枠組みのなかの補填を促す空所の設定や、コンテキストのなかで同等に意義をもつ、選択可能な複数の意味を担ったモチーフの描きこみなどがあると考えているが、それらが内在している長新太の絵本を中心に、現在までの考察の結果を述べたい。

#### ●ビルの悲しみはどこからくるのか？

〈かしこいビル〉に於ける一考察

橋本永子（聖和大学大学院博士後期課程）

筆者は〈かしこいビル/1926〉を初めて読んだ時、訳者の解説と作品との間に、ある種の違和感を覚えた。おばからの招待をうけ、メリーが大切なものをトランクにつめて旅立つ時に、こともあろうか主人公の近衛兵人形ビルを入れ忘れた。置き去りにされたビルは、体を二つ折りにして泣き崩れ、涙の池を作っているのだ。常に冷静であるよう訓練されている近衛兵が、これ程感情をさらけだしている。解説にあるように、全編に流れる“親密な感じや暖かさ、くつろいだ伸びやかさ”を無論感じなくもないが、それよりも、このビルの悲しみがどこから来るのか、がテーマとして迫ってきたのである。再度、解説を読み直し、作者の経歴に目が留まった。21歳で結

婚し、1918年に25年間連れ添った妻が他界。翌年再婚、娘メリーが誕生し、1926年本書を作成、とあった。これは一見、女の子と人形の他愛ないファンタジーの世界が描かれているようだが、実はその奥に、作者自身の人生の振り返りが隠されているのではなかろうか？との疑問とが結びついた。なぜなら、メリーに置き去りにされ、悲しみに打ちひしがれたピルの姿には、25年連れ添った先妻に先立たれた、作者自身の深い悲しみと喪失感が、重ねあわされているように思えてならなかったからである。描かれているおもちゃ類は全て、実際のメリーの持ち物だそうだが、人形スーザンには左腕がなく、あしげの馬アップルの台は車輪が壊れている。心理学に於いて人形は魂の象徴であり、馬は自我を表すという。樋口(1992)は、絵の中の自己像は様々な象徴で表され、何かのイメージと自分を同一化して描く場合が多い、と述べている。

そこで、本研究ではこの作品に登場する各々の事物がそのモノとしてのみ描かれているだけでなく、それらに象徴され、託されたイメージがあるだろうと推測し、ひとつの解釈を提示する。次に作者の略歴を調査した結果、思わぬ事実が解明されたことから、対象喪失と悲哀の仕事についてのフロイトの理論を元に分析し、考察を深めてみる。

### ●絵本の機能的特性

永田 桂子 (武蔵野大学非常勤講師)

絵本の受容者を子どもとおとなに大別し、2者それぞれと絵本との関係から生まれる機能を考察すると次のようになる(図式化したものを当日配布)。

#### 1 子ども受容者と絵本との関係から生まれる機能

子どもだけ(一人或いは複数)で絵本に接する場合と、媒介者(親、教師、保育者など)を介して絵本に接する場合があります、その接し方から次のような機能が生まれる。

- 作り手のメッセージにふれる＝読物性
- 画家の感性にふれる＝ビジュアル性
- 造本や構造計算者にふれる＝玩具性
- 媒介者或いは子ども仲間にもふれる＝共有性

#### 2 おとな受容者と絵本との関係から生まれる機能

おとなの受容には、いわゆる読者として接する場合と、そうではない目的(コレクションする、絵本作家をめざす、ビジネスのために利用する等)で接する場合があります、その接し方から次のような機能が生まれる。

- 作り手のメッセージにふれる＝読物性
- 画家の感性にふれる＝ビジュアル性
- 造本や構造計算者にふれる＝クラフト性

同士(研究者仲間、ファンクラブ、読み聞かせ運動仲間等)にふれる＝共有性  
 作家にふれる＝タレント性  
 スポンサーにふれる＝ビジネス性  
 以上にあげた機能は、絵本に内在する(或いは関わる)人間的側面にふれる部分を取り出したものである。

### ●モスクワから来た日本語訳付きロシア絵本

—概要とその後の日本での翻訳出版を中心に—

丸尾美保

1956年から数年の間、ソビエトで日本語訳を付けて発行された絵本が、ナウカを通じて日本で販売された。確認できた7冊は、『エンピットエノグ』など、アニメーション映画でも有名なステーフ作のものが3冊、『テブクロ』、『三びきのくま』などの民話絵本が3冊、レーニンに関する絵本1冊であった。これらの絵本は、当時のロシア絵本の精髓の一端を伝えるものであった。

特に民話絵本は、民話の架空の世界をリアリズムの手法で伝えるという内容の新鮮さと、簡素な造本ながらうつくしい印刷で日本の絵本作りに大きな刺激を与えたと思われる。中でもラチョフ絵の『テブクロ』は、福音館の松居直の目に留まり、内田莉莎子訳で1965年に発行されて以来、今日まで高い評価を得ている。レーベデフ絵の『三びきのくま』も、1989年に偕成社から発行された。

また、ステーフの『エンピットエノグ』や『オオキサノチガウクルマノワ』は、科学的な興味と、手工の面白さ、共同意識などを、巧みなストーリーと表情豊かな動物たちの絵で伝え、アニメーションと絵本が融合したような新鮮さが感じられる。この3冊を含むステーフの絵本はその後日本で度々発行された。例えば『ニャオといったのはだれでしょう?』は、偕成社から絵本として出され(1969)、福音館のステーフ集『こねずみとえんぴつ』にも収録され(1982)、画家を変えて童心社の紙芝居となっている(水沢研画1966、改訂版1991)。

モスクワで出版されたこれらの絵本が日本で販売された当時の状況を、ナウカ発行の「ナウカの窓」からうかがい、その後の日本での翻訳出版を分析することで、これらの絵本が果たした役割について考察したい。

## 作品発表

### ■A室 進行：笹本純

#### ●『みんな木がすぎ』

深澤涼子

(武蔵野美術大学非常勤講師/阿佐ヶ谷手作り絵本)

#### ●『みてえ みてえ みてえ』

東山直美 (美遊空間主宰)

#### ●『きのあう友だち』

田中稔美 (会社員)

#### ●『つながってる』

村上祐喜子

(手作り絵本夢工房ほか)

### ■B室 進行：正木賢一

#### ●『EARTH CAFE CAKE』

鈴木潤子 (ペンネーム加納潤子)

#### ●『黒うさぎのさがしもの』

内海優美 (会社員)

#### ●『眠れない夜のために』

宮崎詞美

(横浜美術短期大学造形美術科准教授)

上記作品について、大会二日目午後、A室とB室とに分かれて作者による口頭発表があり、また作品は、大会期間中、会場内作品展示室にて公開されました。



## ラウンドテーブル

### ■ラウンドテーブル1

絵本教育の現場から

話題提供者：佐藤博一 (京都造形芸術大学)

笹本純 (筑波大学)

今井良朗 (武蔵野美術大学)

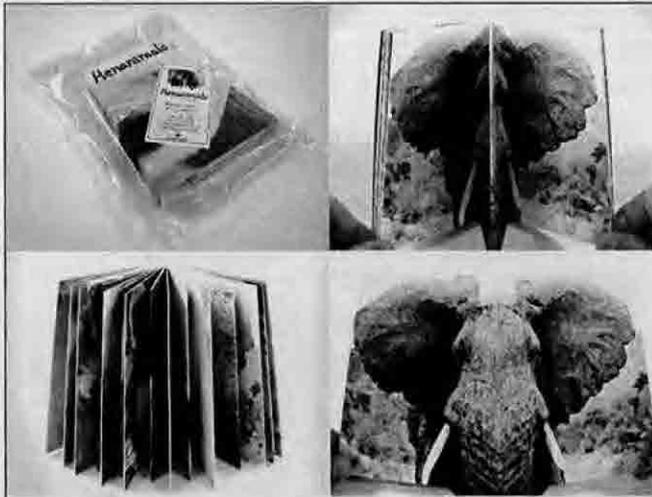
コーディネータ：申明浩 (武蔵野美術大学)

申：最初に大学でどのような形で教育が行われているのか、それぞれからお話いただきます。

佐藤：1991年開学の京都造形芸術大学は幾度かの学科再編を重ね、現在は10学科29コースが設置されています。通信教育部、大学院、こども芸術大学 (3歳から5歳児対象) といった多様な教育・研究機関に加え、絵本・児童書など13,000冊以上の蔵書をもつ子ども図書館「ピッコリー」が短期大学の頃から30年間近く活動を続けていますが、絵本を専門的に研究、制作する学科・コースは設置されていません。しかし、情報デザイン領域の専門科目で数年前から絵本をテーマとした授業が実施されており、本年度から美術工芸学科の選択課題や、新設のこども芸術学科、キャラクターデザイン学科においても絵本制作の課題導入が検討されています。今回は通学部、通信教育部の情報デザイン教育のなかで私に関わる絵本制作の課題事例について報告します。

情報デザイン学科では、1・2年次にタイポグラフィを軸としたデザイン実技とパーソナルコンピュータの操作技術、写真、映像、立体、平面などの表現メディアを横断的に学び、3年次以降はテーマ別のゼミやコース別課題によって専門性をより深めていくカリキュラムになっています。「自己表現から自己実現へ」をキーワードに、デザイン基礎、セルフ・プレゼンテーション、企業研究、卒業制作へと段階的に進んでいくのですが、学生が専門的に絵本と触れる授業としては、まず「視覚文化論」が挙げられます。この科目は中川素子先生を客員教授としてお招きし、毎年9月に3日間終日の集中授業として開講しています。視覚表現としての絵本論を中心に、多くの資料を見せていただくのですが、座学で終始せず、最終的には自由度の高い絵本制作課題が設定されます。学生作品『Henanimals (ヘナニマルズ)』<図版1>は、この授業の成果物で、ページの伸縮によって動物の顔が変化するユニークな仕掛け絵本です。

専門実習の中での絵本制作は、客員教授である長谷川集平先生に年間数回、長崎からご出講いただき、2003年度から選択課題として実施しています。年度によって、履修対



＜図版1＞張太榮・作『Henanimals (ヘナニマルズ)』(2006年)  
動物の顔が立体的に感じられる。

象や課題の位置づけ、年間スケジュールは異なりますが、長谷川先生による講義、「おべんとう絵本」の制作を導入に、最後は全員が本文32頁の絵本を制作します。実際の出版物に近づけることを重視しているため、必ず同じもの3部を複製、製本し、提出することが条件となっており、その背景に「絵本というかたちになってこそ完成作品」という明快な考え方が存在しています。制作テーマは「自己を否定する」(2003年度)、「抗議する・反抗する」(2004・2005年度)、「NO! (ノー) と言う」(2006年度)と変遷していますが、いずれも、絵本をファンタジックな世界として捉えるのではなく、経験に基づいたリアリティのある表現を自分なりに追究し、現代社会の諸問題と対峙することを視野に入れた課題です。私はこの授業で、長谷川先生のご出講日以外に、サムネイルの制作を含めた制作相談、デジタルイメージへの変換、紙と出力、製本方法などの技術的フォローを行ないつつ、受講生各自が、それぞれ異なる「絵本体験」をもとに、表現としての可能性を絵本に見だしていく過程に立ち会いながら、ファシリテーターとしての役割を務めています。2003年度の作品には、絵を描かずに図形と文章だけで表現した秀作があります。中国から日本に留学した学生が、単純な幾何学形態とタイポグラフィによる表現の工夫によって、自己のアイデンティティーを探ろうとした作品です。昨年度は、絵、文章、レイアウト、ブックデザイン、など全体的にバランスがとれた絵本や、絵の魅力と用紙選択に凝った絵本、キャラクターづくりに徹底的にこだわった絵本、マンガ表現を意識した絵本など、多くの興味深い作品が生まれだされました。中でも優秀だったのは『月の花咲く停車場』＜図版2＞で、塾通いの少年が途中下車した駅で老人と語らう、美しい風景の描写と静かな物語が印象的な作品です。作者は大学以外でも一般対象の「えほん教室」に通い、黒井健先生、斉藤洋先生はじめ、多くの作家の方々に制作指導を受けていましたが、授業で長谷川集平先生に多くの助言をいただき、主人

公の少年のみならず読者もまた傍観者では済まない内容をもつ完成度の高い作品に仕上げることができました。これまで絵本制作の授業は3年次生を対象としていましたが、本年度は3・4年次生を対象としたゼミとして開講しており、「子どもに伝えたいメッセージ」をテーマに長谷川先生と授業を進めています。また、今年新しく開設したイラストレーションコースでは、1年次から長谷川先生に授業をご担当いただき、より充実したカリキュラムづくりを展望しています。

これまで私は専門科目の中で、ブックアートを含めた本の制作を通して、多面的にデザインと出版文化の問題を扱ってきましたが、絵本は造形芸術分野の専門課題として多様性に富む魅力があり、受講生のモチベーションも高く、多くの可能性があると感じています。3日間完結で成果物評価を行なう通信教育部のスクーリング授業では、進行計画の立案がやや困難でしたが、通学部と同様に本文32頁でハードカバー製本の絵本制作の課題を実施しました。学生作品例『バーちゃんのはな』＜図版3＞は、サムネイルに描かれたキャラクターのタッチを、デジタル技術を駆使し、そのまま拡大することによって、絵の制作時間を大幅に短縮した作品ですが、豊かな物語性と絵本づくりの体裁に一応の完成度が見られます。この授業においても受講生の表現に対する実感を高めることを目的に、存在感のある「物体」としての絵本制作指導に努めました。

絵本に対する認識や体験をもたない学生はほとんどいません。その意味で絵本制作や絵本研究への動機は誰もが既にもっているのではないのでしょうか。デザイン科在学中に出会う数多くの選択課題のひとつである絵本制作が、直接、絵本作家の育成に繋がるとは考えていませんが、絵本の広がりを見望できる入り口に立って、絵本表現の奥深い世界



＜図版2＞まるさわひろみ・作『月の花咲く停車場』(2006年)  
上製本B5判32頁  
まるさわひろみ・作『月の花咲く停車場』(2006年) 第11画面



＜図版3＞『バーちゃんのはな』(2006年) 上製本B5判32頁  
『バーちゃんのはな』(2006年) 第14画面

を自覚し、自己の成長とともに、絵本に対する認識を高め  
ていけるような教育内容の提供が重要だと思っています。

(佐藤博一記)

#### 笹本：

筑波大学芸術専門学群で実施している絵本関連の創作教育について報告します。ここでは、絵本を絵本としてだけ考えるのではなく、絵本をそのうちに含むやや広い領域を前提とし、その一部で絵本を扱います。ここでいう絵本を含む領域というのは、1) 画像と言葉を複合的に働かせて表現・伝達を行う、2) 本の形式を用い、その紙面を活かして表現する、といった条件によって規定されるようなものです。

こうした考えにより私が行っている制作系の授業は2種類あります。1つは「ナラティブイラストレーション演習」と呼んでいるもの。もう1つは、「ブックワーク演習」というものです。

「ナラティブイラストレーション」では、物語のための手段として絵を使用する分野を扱います。物語という用語は、時間軸に沿って情報提供をすること一般というほどの広義の意味で使っています。この授業は具体的には、絵本とマンガを作ることを主な内容とします。

「ブックワーク」は、本という形式を造形表現のための枠組として捉え、作品としての本を作るという主旨のものです。「ナラティブイラストレーション」では、本の形としてはオーソドックスなものを用意して、その中身をどうするかを考えますが、「ブックワーク」では、本の造形的な形式面を色々と工夫して表現することを問題にします。

以下2つの授業の内容を紹介します。制作系の授業では、教員の用意した課題に即して学生がものを作るというのが基本的なスタイルです。ここでは私の授業ではどんな課題が課されているかを示します。1つの授業の中でも色々な課題が用意されます。それらは一定の教育的意図のもとづき順次与えられ、学生にはそれに応えることが求められる訳です。学生作品を実際に持ってきましたので、会場内で回覧して頂くことで紹介します。沢山ありますので適当にリレーして下さい。

#### ●ナラティブイラストレーション演習

##### ◎言葉に基づいて絵を考える

用意された一定の言葉(短文)に対して画像を与え、言葉(文字)と絵とを1つの画面内に表現する。同一のテキストに基づいていても形成される画像が様々であり得ることを学ぶ。

##### ◎絵に基づいて言葉を考える

用意された絵(シンプルな既成画像の写し)にふさわしい言葉の表現を考え、絵と言葉(文字)を一体化した画面を作る。1つの絵が添えられる言葉によって様々に異なった

意味を表すことを学ぶ。

##### ◎お弁当絵本

長谷川集平さん創案の「お弁当絵本」を課題とする。これは偶然的に得られた形に言葉を与えることで新たな意味を創造する試みである。創作に付随しがちな不安を払拭し、各人の物語る力を呼び起こす優れた課題である。

##### ◎創作絵本

各人の創意に基づく絵本制作。絵本表現に係る基本的なハウツーを学んだ後、絵コンテ・ダミー・試作本等の手順を踏んで制作する。各段階ごとに教員の指導が入る。

##### ◎2コママンガ

コマを用いるマンガ表現の最もシンプルな形として2コマのマンガを作る。「ビフォー&アフター」をキーワードとし、物事の変化の中に物語性を見いだすことを考える。

##### ◎人の噂を内容とする1頁マンガ

誰にでも取り組み易いコンテンツとして人の噂を取り上げる。「私の知る○○○は、□□□な人です。例えばこんなことがありました。…」という作文から始め、それに基づいて1頁のマンガを制作する。

##### ◎創作マンガ

各人の創意に基づくマンガ制作。分量は12頁または16頁とするが、多くてもかまわない。内容面の創作が不得意の者は既成のテキストの漫画化でも可とする。「グリとグラ」の原作である中川李枝子作「たまご」は、画像化マンガ化のための素材として適当である。

#### ●ブックワーク演習

##### ◎折りのあるカード

二つ折り、あるいは三つ折りにしたカードの形の作品。折ってある状態で見えるイメージが、開くと大きく変化することの中に面白さを盛り込む。本という形式の持つ開く閉じるという性質の、最も素朴な形に取り組む。

##### ◎8頁中とじ本

表紙、裏表紙の間にはさまれた3つの見開きという本の基本形を通じて、表紙の機能、順序ある紙面展開による表現などを再確認する。

##### ◎折り本(ジャバラ本)

一見開きずつ見ることも可能だが広げて全体を見ることも出来、また紙面の裏側に独自の活用法があるといった、折り本の造形可能性を探る。

##### ◎穴あき本

紙面に穴の空いた本の活用を考える。穴には、次頁が見えるのみならず、裏表があるという性質があり、これが制約となってユニークな表現が生まれる。

##### ◎フリップブック

パラバラ漫画と呼ばれる形式の新しい可能性の追求。

##### ◎自由な創作によるブックワーク作品

本の造形性を活用した新しい形式内容の作品の制作。

以上のような教育実践を通じて私の求める所は、より大きな広がりの中で「絵本」の可能性を探り、また若い世代の創造力を高めていきたいということです。

幾つか問題もあります。ともすれば表現の形式面を重視しがちになるのが私の場合の特徴で、内容面に係る創作力の養成も必要なので、そのためにはどのようなやり方があるのか？といったことが一つ。また、同一の教材を用いても、それを活かせるかどうかは教師の能力次第であり、創作教育に係る教員の能力開発法は如何？といったこともあります。(笹本純記)

今井：

学生たちが授業の中で絵本を制作していくプロセスを紹介したいと思います。

授業はヴィジュアル・コミュニケーション・デザインという2年生対象の授業で、絵本制作だけを目的にした授業ではありません。授業の意図を、「デザインを絵本を通して学ぶ」「絵本をデザインから学ぶ」ことに置いています。編集することと言葉とイメージの問題をしっかりと考えてもらうためです。

私は、このような形で絵本に関連する授業を20数年行ってきました。以外に思われるかもしれませんが、今回の展覧会「ムサビと絵本」で取り上げている作家のほぼ8割はデザイン系の出身です。その内の6人は私の教室にいた人たちですが、そのほとんどが最初から絵本作家を目指していたわけではありません。

ムサビには、最初から絵本作家を目指す学生のためのカリキュラムはありません。

美術大学での絵本づくり＝絵を描くことという固定的な観念がどうしてもありますが、授業ではこの単純な図式から抜け出させることから始めます。それは、絵を描くこと以上に絵本を総合的な創造行為としてとらえてもらうためです。

そのために授業では、言葉とイメージの関係を制作を通して実感してもらうことに重きを置きます。完成度を求めるのではなく自分が表現しようとしていることを確認していく作業です。

毎年課題の内容は異なりますが、全体としては次のことを目標に授業を進めます。1.言葉とイメージについて、2.時間と空間の表現について、3.絵本の構造についての学習です。

今年度の課題は、遠藤彰子さんの絵画「訪う」(図1)を基に、そこからストーリーを展開し視覚表現に発展させ絵本にするというものです。絵画から新たなイメージを紡ぎ出す方法です。テキストを題材にしないで、あえて視覚的に表現された絵画を用いたのは、視覚的イメージを先行させいきなり絵に入っていくことを避けるためです。言葉に

よる思考、言葉とイメージの関係を理屈ではなく実感としてとらえてもらいます。

授業は、最初の2回は30冊ほどの絵本を紹介しながら絵本の表現について話をします。3回目以降は、毎回スケッチや言葉にしたものをそれぞれが発表し、自由にディスカッションを行い、そこから出てきた問題点を掘り下げていく形で進めます。

構想を練っていく段階では、テーマや表現を自分自身の問題や立脚点から発展させるために、あえて対象年齢や表現形式を設定しません。学校で学ぶ場合市場の原理や形式を最初から意識する必要はないと思っています。

ここから2人の学生の制作のプロセスを紹介します。

1・最初に(図2)のような用紙を配ります。絵とテキスト両方が書き込めるようになっています。

元の絵からどのように発展させても構いませんが、この学生は絵の中の犬に注目し、建物を外側から眺める、犬の視点で客観的にまず絵に時間を与え動かしてみました。犬を起点に絵を読み取る、動きを与えるという方



図1



図2



橋の下には物陰のかけらが散らっている

図6



図7



図8

さん入ってきます。ところが授業内で、あなたたちは絵本をどういう風に捉えているの？と、ことばで引き出していくと、こどものときに見た印象が強すぎて、絵本で何かを表現しようとするまでのプロセスにひどく距離があります。

絵本の歴史をたどり、現在でている絵本を見せていくと、今まで学生たちの持っていた絵本のイメージがぐるっと変わります。そこからは自分の問題になりますし、こどもを意識する視点をもつことも大切なのですが、自分自身が絵本という具体的なイメージをはっきりと確立していない状態で、ものを作らせてしまうと、(固定されたイメージのせいで)入り口と出口が違ってしまふのだな、と感ずることがあります。

**質問：**

申：私の方からも質問させてください。

佐藤先生は、大学の授業方針として出口をはっきりと見えるものを、と講義の中で強くおっしゃっていました。しかし、絵本をつくる、特に絵本作家になるというのは、よほどのケースを別として、とても難しい領域であると思えます。今井先生がおっしゃったように、デザインを学び、社会に出て何年か経ってから絵本をつくる方も多いですし、みなさんご存知のレオ・レオニのように晩年になっ

てから絵本制作に戻ることもあります。絵本作家になるためには学校の中の教育だけではなく、もっと色々な要素が重要になると思います。もちろん学生全員を絵本作家として社会に出すわけではないと思いますが、先生方が教育する上で、絵本作家として学生にどこまでのレベルを求めているのでしょうか。

**回答：**

佐藤：まず、絵本作家という定義が難しいですよ、何作出して何部売れば絵本作家となるのか、という問題もありますし。本は出そうと思ったら出すことはできますが.....。

この春に卒業した学生で、長谷川集平さんの授業で優秀作品を作った男の子がいます。長谷川さんがある出版社に見せに行ったところ、編集者がぼろぼろ泣いてくれて是非出版しましょうという流れになったんです。その男の子自身は特に絵本作家になりたいとは全然思っていませんでした。自分の絵本が出版されていく中で、本人が自分を見直す問題になるでしょう。

いずれにしても、私に関わっていく授業の中で、B5のハードカバーの本を何冊も作れるレベルにまでさせる、その授業のこだわりというのは、絵本の実感を持ってもらった上で、これらを作れるようになったあなたはさてこれからどうしますか、という問いかけのためなのです。ですからそういう意味では、はじめから絵本作家にならせたいとは思っていません。

笹本：もともと筑波大学では、大学全体としてもそうなのですが、芸術学部での教育方針として、特定分野のスペシャリストをつくるわけではないという志向が伝統的に強くあるのです。

私が現在所属している芸術の中の専攻は、「構成」といって純粋なアートとデザインのちょうど中間の領域です。うちの卒業生の進路は多彩で、現代美術を専らしているものもいますし、デザイナーになるものもいます。家電や車のメーカーで企画をしているものもいますし、造形とは関係なくユニクロで服を売っているものもいます。多種多様です。

こういう中で私の仕事は、3、4人の教員とともにビジュアルデザインを教えるということになっていて、基本的にはデザイナー養成をしています。そこでの考え方として、狭い専門しか知らないというのではなく、例えば木工をしたことのあるグラフィックデザイナーといったものになって欲しいと思うのです。絵本制作をしたことのある自動車メーカー社員でもいいわけです。そういう考え方なのです。

もちろん、学生個人個人は様々で、漫画家になりたいとあって、卒業後、単行本を出す所までいって漫画で食べてるものもいますし、絵本作家かどうかは分かりませんが、出版社の企画で絵本を出したという人もいます。でも絵本



橋の下には物語のかけらが落ちている

図6



図7



図8

さん入ってきます。ところが授業内で、あなたたちは絵本をどういう風に捉えているの？と、ことばで引き出していくと、こどものときに見た印象が強すぎて、絵本で何かを表現しようとするまでのプロセスにひどく距離があります。

絵本の歴史をたどり、現在でている絵本を見せていくと、今まで学生たちの持っていた絵本のイメージがぐると変わります。そこからは自分の問題になりますし、こどもを意識する視点をもつことも大切なのですが、自分自身が絵本という具体的なイメージをはっきりと確立していない状態で、ものを作らせてしまうと、(固定されたイメージのせい)入り口と出口が違ってしまふのだな、と感ずることがあります。

**質問：**

申：私の方からも質問させてください。

佐藤先生は、大学の授業方針として出口がはっきりと見えるものを、と講義の中で強くおっしゃっていました。

しかし、絵本をつくる、特に絵本作家になるというのは、よほどのケースを別として、とても難しい領域であると思います。今井先生がおっしゃったように、デザインを学び、社会に出て何年か経ってから絵本をつくる方も多いですし、みなさんもご存知のレオ・レオニのように晩年になっ

てから絵本制作に戻ることもあります。絵本作家になるためには学校の中の教育だけではなく、もっと色々な要素が重要になると思います。もちろん学生全員を絵本作家として社会に出すわけではないと思いますが、先生方が教育する上で、絵本作家として学生にどこまでのレベルを求めているのでしょうか。

**回答：**

佐藤：まず、絵本作家という定義が難しいですよね、何作出して何部売れば絵本作家となるのか、という問題もありますし。本は出そうと思ったら出すことはできますが.....。

この春に卒業した学生で、長谷川集平さんの授業で優秀作品を作った男の子がいます。長谷川さんがある出版社に見せに行ったところ、編集者がほろほろ泣いてくれて是非出版しましょうという流れになったんです。その男の子自身は特に絵本作家になりたいとは全然思っていませんでした。自分の絵本が出版されていく中で、本人が自分を見直す問題になるでしょう。

いずれにしても、私に関わっていく授業の中で、B5のハードカバーの本を何冊も作れるレベルにまでさせる、その授業のこだわりというのは、絵本の実感を持ってもらった上で、これらを作れるようになったあなたはさてこれからどうしますか、という問いかけのためなのです。ですからそういう意味では、はじめから絵本作家にならせたいとは思っていません。

笹本：もともと筑波大学では、大学全体としてもそうなのですが、芸術学部での教育方針として、特定分野のスペシャリストをつくるわけではないという志向が伝統的に強くあるのです。

私が現在所属している芸術の中の専攻は、「構成」といって純粋なアートとデザインのちょうど中間の領域です。うちの卒業生の進路は多彩で、現代美術を専らしているものもいますし、デザイナーになるものもいます。家電や車のメーカーで企画をしているものもいますし、造形とは関係なくユニクロで服を売っているものもいます。多種多様です。

こういう中で私の仕事は、3、4人の教員とともにビジュアルデザインを教えるということになっていて、基本的にはデザイナー養成をしています。そこでの考え方として、狭い専門しか知らないというのではなく、例えば木工をしたことのあるグラフィックデザイナーといったものになって欲しいと思うのです。絵本制作をしたことのある自動車メーカー社員でもいいわけです。そういう考え方なのです。

もちろん、学生個人個人は様々で、漫画家になりたいという、卒業後、単行本を出す所までいって漫画で食べてるものもいますし、絵本作家かどうかは分かりませんが、出版社の企画で絵本を出したという人もいます。でも絵本

だけで生活している人はいません。学校の教員になっていたり、主婦であり絵本作家を目指している人はいます。

絵本作家を育てることをうたって人を集めている学校もありますし、それはそれでいいのですが、私たちの所の教育の目標・方針は、そうではないのです。

**質問：**

今井先生にお伺いしたいのですが、ひとつ注目するものから、ある種の記憶に入って自分をくぐらせて、そこからまた自分を切り離して、絵本を作っていくというプロセスは、私たちの論文指導とかなり似ています。先ほどデザイン系出身者が80パーセントを占めると仰っていました。論文を書く場合は、論文の種類にもよりますが、理系や文系がありますし、ことばというものがかなりポイントになりますから、理工系もまた違ってきます。そこでデザインが中心になって語られるという意味をもう少しお聞きしたいです。

**回答：**

今井：経験的なものなのですが武蔵野美術大学に約30年いて、1年生の時絵本作家になりたいと言って、最終的に僕の側に残った人はほとんどいません。なぜかと言うと、それらの学生の多くは、ただ絵を描きたいからという理由が一番大きいからです。ところが、デザインを勉強してから、どうしてもこういう表現をしたい、こどものためにこういう絵本を作りたい、といった明白な動機が生まれたとき、絵本の世界がきちっと見えてくる場合があります。

デザインの方が学ぶことが多様です。結果的には(絵本の世界に)入っていきやすいのですが、絵画だけ描いていると、どうしても自分の絵の中にこだわりが出てきますから、物語の組み立てや本の全体の構造に対してやや甘くなってしまうがちです。もちろん絵画系の出身者がいないわけではありませんし、そういう人たちは違った観点からデザインを自ら学んでいることが多いです。

例えば、出久根育さんは版画出身ですが、板橋で学んだ絵本講座が非常に重要であったと仰っていますし、その後、カーライさんから学んだことも大きかったようです。そこで学んだこととは、絵画プラスα、本づくりのための論理性が加わったことで、全体像が完成されました。

しかし、出久根さんの絵を見て僕がつくづく感じることは、最後はやはり表現力があると強いということです。ことばは難しいのですが、本当にいい絵本の形とは、最後に豊かな表現力が加わることで非常に強いものになります。出久根さんの絵本を見ていると、やはり凄いなと、そう思います。ですが、絵本と結び背景としては、デザインを学んだほうがより近づきやすいと思います。

そして、さきほどの論文に近い発想ということですが、僕はことばもイメージも両方、豊かでなければならぬと

思っています。イメージが豊かであるということは、ことばも豊かであるはずであり、ことばが豊かであるならば、イメージも豊かであるはずなのです。ですから両方をきちんと持つんだと、自覚するべきだと思っています。

芸術文化学科の学生は、基本的にことばの表現のほうに得意です。それなのに絵本制作のときは最初から絵を描こうとします。だけど、ことばの豊かさをもっと具体的にイメージし視覚化する方法を開発していけば、もっと違う発展の仕方ができるのではないのでしょうか。

また一方で、絵の中に持っているイメージの豊かな部分をことばで引き出し考えていくことによって、ことばの豊かさを発見することもできるのではないかと、そういったことを常に言っています。ですから両方大切ですし、片方だけが得意だという人はいないのではないかと考えているのです。

**質問：**

たった今、今井先生が(絵本には)最終的には優れた表現力だと仰いました。

昨日の講演が、ドゥシャン・カーライさんと長谷川集平さんということでも面白かったです。徹底して絵画表現としてのスキルを画面で否が応でも実感させられたカーライさんと、絵本づくり講座を通して絵本表現の可能性を探る長谷川さんと、どちらであっても絵本に向かうわけですが、美術表現をしていくことのスキルを培うことに関して、それぞれの先生方はそれぞれの学校で、また学校内だけではなくともどのように考えておられるのでしょうか。

**回答：**

笹本：表現力というのは色々あると思います。すごく下手な絵でも絵本として良いのを作れば、それは表現力を発揮してるわけですよ。

おそらく今井先生が仰ったのは、造形的、美術的に優れた表現をするという意味での表現力だと思いますが、そのことに関して言えば、私は私の今紹介した授業の中ではこの面に触れる余裕がほとんどありません。筑波大学の芸術系では、他の授業で木工でもデッサンでも何でもやってこいということで他の先生にやってもらっていますので、それでも良いわけです。

表現力の養成ということでは、同じように学んでも身につくものはそれぞれ違いますから、そういう部分は教育できるのかという話にいつもなるわけです。確かに基礎的なものはあると思いますが、それ以上のことは、本人の素質・才能とか、あるいは好きなことをどんどんやっつけて数をこなすと、どの分野でも同じことですが、表現力が高まるということもある。曖昧な言い方になってしまっていますが、生まれ持ったものであれどうであれ感性なんてものも重要

ですよ。ただ私は感性は前に出したくないんです、それをいってしまうと甘いものになりがちです。とても難しいところですよ、佐藤先生はどうお考えになりますか？

**佐藤：**一般的な表現力というのは、芸術大学の基礎のカリキュラムでほとんど共通してあると思うのですが、次の段階である絵本の表現力、と限定した場合、京都造形芸術大学の授業の取り組みというのは、今日導入部でお話したように、実技では長谷川さんがモチベーションをあたえ、最初から絵本作りをスタートさせます。先に絵があるわけでもなく文章でもなく、その両方を同時に最初の段階できっかけとしてあたえられます。これはひとつの特徴だと思っています。

その際、絵本を読んだことがない学生はほとんどいませんので、どのくらいの絵本を読んだか、どのような種類の作品を読んできたのか、もしくはそれ以外のものでは何を見てきたかなど、個人の経験と言いますか、絵本体験は様々で皆ちがいます。ことばではうまく言えないのですけれども、元々誰でもが絵を描けるといいますし、文を書けるといいますが、実際絵本表現として高めていくために、そうした彼らの記憶や絵本体験の蓋を開けてあげるため、授業ではディスカッションの時間を多く割いて、長谷川さんや学生たちと行っています。

その結果得られるものは、表現力ではなく、どちらかといえば実現力であり、その人がただ表現するのではなく、なにかの目的に対してちゃんと実現してくれるための手法であったり、考えであったり、取り組む姿勢を授業では得ているのではないかと思います。

**今井：**今の質問の内容をちょうど長谷川集平さんとお昼に話していたんです。表現力が最終的に必要ですよ、という話の中から展開していったものなのですが、絵本教育の現場で教えるということは「教える」ということではないんだ、という話です。

相手の持っている良い部分をどうやって見つけてあげるか、あるいは引き出してあげるかなんです。デッサンができるとか素描が上手いとかどうでもいいのです。デッサン力があるから絵が描けるのではなく、今自分が表現したいときにどんな技術が必要なのか。そのときにはじめて鍛錬するもので、時にはパステルかもしれないし、マーカーかもしれない。あるいは鉛筆か、ペンかもしれない、手法はなんでもいい、これで自分のイメージを具現化できるんだとしたら、どういう風にすればいいのかと徹底的に突き詰めていくときに、本当の意味で技術というのは自分で覚えるわけですね。そのことが大事だと長谷川さんと話をしました。

そうでないと本当の絵にはならない。だから長谷川さんも僕も最初からデッサン力があったわけではないと話していましたし、結局最終的には自分の表現方法は自分で見つ

けるしかない。じゃあ学校はなんだといえば、その人の持っているいいところを早く発見してあげるところなんだ、と。そこで僕は、絵本作家になれるかなれないかの可能性も含めて、学校と繋がっていること自体が人口だと思いません。常に僕の中で心がけていることは、そういう環境を作っておくということです。本当にその道に行きたいと思った場合、どうやったらその方向に行けるのかというベースだけ作っておく、基本的なことだけは勉強しようとか、最低この作家だけは見ておこう、という形ではやっていきますが、最後は自分で作っていくしかない。

だけど表現力はとても大事だと思っています。展覧会で出久根さんの原画を見ていて本当に思うのは、ものすごいこだわりを感じるんです。最初から本になること前提に描いてあるにも関わらず、板の側面にも絵が入っている。そしてその板も石膏が塗られていて、そのうえに油絵とテンペラで丹念に描き込まれている。それは一枚一枚の絵に対する執着なんだと思いますし、僕も最後はそこまでいけばいいと思うんです。ですからデザイン力と構成力があれば絵本はできる……、という単純な図式だけではまずいと思いますし、表現力というのはどこかに自分のものとしてプラスにして欲しいと思っています。

**質問：**笹本先生と佐藤先生は、絵本作家を育てることを目的として絵本の授業を行っているわけではないのだと仰っていたのですが、絵本を作ることを大学でカリキュラムに組み込むことの意味というのはどこにあるのか、なぜ絵本でなければならぬのか、ということについてお話をしたいと思います。

**回答：**

**佐藤：**理由はたくさんありすぎて答えづらいのですが、私立大学としては「絵本」というキーワードは高校生がきます。事実、絵本を作りたいという願望を持った学生さんは絵本の授業がなかったときからたくさんいました。それは向こうで対応するとか、卒業制作、自主制作でやったときに結果がでてきましたし、そういうニーズはずっと感じておりました。またもう一方で個人のモチベーションで言いますと、私はずっと写真やグラフィックデザインの編集、ブックデザインなんかをやっているんですけども、あるとき本の将来というものを考えてみたときに、アーカイブとしての作品集とかはどんどんデータになっていくかもしれないのに、絵本は絵本という物体のまま必ず残るんじゃないか、というようにどこかで神のお告げがあったような、そんな感じです。

**笹本：**なぜ彫刻を教えるのかというのと同じで、別になんでもいいんですよ、どんなことでも、各々やればやったなりに他にも活かせるものが学べるわけです。

教える側で興味を持ち面白いと思っていて、学生たちに

もとにかくやりたいと思っている人がたくさんいます。それに答えてあげることが、教育の一環として意味があると思います。

それに、絵本というものは、いろんな形のエレメントが絡んでくる複雑なメディアですよね。それが非常に面白いところです。簡単に文学と美術の統合だとか色んな言い方をされますけれど、そんな単純に割り切れるものではなくて、もっともっと複雑ですよ。しかも比較的とっつきやすい。映画を作ろうというところとちょっと難しくなります。そういう点でものを表現したり考えたり、創作すること一般に関して、創造的な力をつける上で、絵本をやるとするのは非常に有意義なことではないかと思っています。

今井：僕の場合は単純明快です。武蔵野美術大学が絵本を集めたのはちょうど30年くらい前ですが、毎年3000冊ほどの絵本を見ました。その多様性と表現の豊かさに絵本がなんて面白いんだろう、これを授業に使わない手はない、と思ったんです。デザインの授業でこんなにいい教材はない、と思いました。僕はエディトリアルデザイン、いわゆる編集とデザインを教えていましたが、絵本を使うことによってほとんどのことが教えられるんですね。ですからそのために絵本を取り入れたというのが一番の理由です。結果的にそれを繰り返している間に、そこから絵本の作家になった人たちが何人か出たということです。

#### 会場から：

文学部があるから作家を育てるということには繋がらないし、絵本講座があるから絵本作家ともすぐには繋がらないし、むしろ美術の教育で絵本を使われていたほうがいいのではないかと思います。絵本作家がその中で出てくるのは、それに越したことはないのですが、そこにはひとつ欠けてるものがあります。それは絵本編集者です。絵本編集者を、ぜひ美術系、美大系の学校からだしていただきたい。というのは、今非常に危機的状況なんです。大量の退職者と同時に大量の新人が入ってきてその教育もままならず、入ってくる人たちというのは大体文科系が多いです。だから絵も知らない、文章も知らない人が多い。だから出版社の絵本編集者の再教育としてこういう講座があってもいいんじゃないかとすら私は思っています。ですからただただ美術の学生相手に本を教えるというだけではなくて、もう少し開かれた場所で絵本の方法論とか絵本の中に入っている様々な事柄を教育する場所を考えていただけたらなあ、と思っています。

(質疑応答記述：中牧まどか)

## ■ラウンドテーブル2

絵本表現の現場から

話題提供者：ドウシャン・カーライ

(作家・プラティスラバ美術大学教授)

コーディネータ：松岡希代子(板橋区立美術館)

通訳：小野田若菜

このラウンドテーブルでは、初日の講演でみせていただいた大量のスライドの一部をもう一度見せていただき、実際の作品制作時のエピソードなども伺いながら、カーライさんの「絵本作り」がどのようになされているのかお話ししていただきました。

カーライさんは、日本でも知られている絵本作家ですが、その活動は絵画、版画、切手デザインと幅が広く、さらに、スロヴァキア唯一の6年制の美術大学の版画・イラストレーション部門の教授として、学生の指導にあたっていらっしゃる教育者でもあります。大学には、カーライさんを慕って世界中から学生が集まってきており、そのなかには、『ともだちや』で人気の絵本作家、降矢奈々さんも含まれていました。

なぜ私がコーディネータを引き受けたかといいますと、板橋区立美術館ではイタリアボローニャ国際原画展というのを20年以上、開催しています。このボローニャのコンクールは、必ず国際審査団の方が審査するという方法ですが、98年のボローニャの審査員として、カーライさんが審査員を務めていました。私は、作品では知っていましたが、その時に初めて目にした審査風景の時の、カーライさんの作品の見方に非常に感動しました。とにかく広い部屋にテーブルが目一杯並んでいて世界中から来ているイラストレーションが並んでいます。その中から3日間で展覧会に出品する絵を選ばなければなりません。その時、カーライさんは5名の審査団の一人でしたが、他の審査員は作品の悪いところを指摘するのですが、カーライさんは、他の人と違う見方をしていました。それは、弁護士さんのような、一枚の絵があると、上の方がうまくいって、下の方がうまくいっていない絵をみつけては、下を隠して、上をほめたりと、他の人が見落としそうなところを指摘していたのが印象的でした。

私自身が美大出身なので、もしも早くカーライのような先生に会ったら絵を描き続けていたのではないかと、その時に思いました。その時、とにかく感動して、日本でイラストレータを目指している人に指導するようなワークショップをしてくれますかと、聞いてみたら、意外にも、カーライさんから「いいですよ」と返事を簡単にもらったのです。それで生まれたのが【夏のアトリエ】です。10年前に板橋区立美術館で始まった【夏のアトリエ】

エ】というセミナーの名付け親もカーライさんです。1週間滞在してもらい、イラストレータの人たちに朝から晩まで制作を一緒にし、作家同士のつきあいを行ってくれたのです。その時の受講生が出久根育、たしろちさと、なかむらしんいちろうです。彼らに大きな影響を与え、彼らが絵本作家として活躍する道を開いたとも言えます。このように、カーライさんと日本との関係は深く、今回が5回目の来日になります。

そういうことで、私にとっては恩人といえるカーライさんであり、今回、絵本学会でラウンドテーブルを行うということでコーディネータを勤めることになったのです。

講演では沢山のスライドをまるで短距離ランナーが走っているかのように見ましたので、もう少し実際の制作についての話をしようというところから始まりました。また昨日出てきた問題点である、テキストにどれくらい添ってイラストレーションを描くのかという点、イラストレータにどれくらいの自由度が許されるのかという点について話そうということになりました。

カーライさんの絵本作りの特徴は、なんといってもテキストをきちんと読み込んでいるところにあります。最初に例に上がったのが、シェイクスピアの「ハムレット」でした。テキストを読み込んで、自分なりのハムレット像を明らかにした後、それを表現するのにふさわしい技法を考える。ハムレットは、カーライさんがシェイクスピアのハムレットを作ったときのイメージとして、古い遺跡のようなそういうイメージでそれに合う技法を考え制作したそうです。最近のハムレットの絵はテーマが同じでも、全く違う技法を使っています。ただ、自分の中での解釈は同じであり、技法を変えることによってリフレッシュしているということです。いつも同じやり方にとどまるのではなく、技法を変えることによる、浄化作用もあるので、ふさわしい技法を考えるところからはじめるのは大切なことだといいます。グワッシュを使ったり、版画にしたり、いろいろ工夫します。

スライドで見た例では、作品を出版する出版社は2色、色のついた刷りにしたいと言っていました。カーライさんはエッチングが一番合うと思ったそうですが、黒の他、茶色と赤茶色の二色のインクを用いて刷ることにしてみました。そこで、準備していた方法をかえて、フィルムを用意し一つ目が赤い色、もう一つが茶色で、一番下に白黒のエッチングを使用しました。技法は出版社からこのように出版したいという条件の元に無理やり考えたものですが、それによって新しい表現ができた一つの例でもあるのです。また見返しには、物語の要素をひとつとり出して、象徴的に模様にして、本の世界の入り口になるように工夫し



ています。

イラストレータにどのくらい自由があるか、ということについては、オスカーワイルドの詩につけた絵を例にお話いただきました。この作品は、エッチングとエングレービングを併用しています。カーライさんは、基本的に、イラストレータは、表現において自由だといいます。なぜなら、イラストレータは、そのテキストを自由に解釈して物語のどこを描きだすか、自分で決めることができるからです。しかし、そこにも、テキストの深い読み込みが不可欠であることを感じました。つまり、カーライさんの作品の魅力には、テキストの深い読み込みによる、文学的な深みが大きくプラスしていると言えるからです。

「本づくり」へのこだわりについては、対向ページのイラストのレイアウトなども考えて、本全体の構成上の工夫もしながら、作りあげていきます。レイアウトは活字を含めた状態でのレイアウトにこだわります。活字を含めた状態で一つの絵になる状態に仕上げたいと考えているのです。絵の中に線を作り出すようにレイアウトを考えています。文字はコンピュータを使わないので手書きでレイアウトを考えます。

またある本では小鳥がナレーターのような役割を果たし、全てのページに出てくるようになっていきます。また、左右のページを開いたときにみえない線、右のページの鳥から左のページの別の部分を結ぶ線、その線を大切に考えています。本を開いたときに視線がどこに行くか、その「点」は大切に思っているのです。ただ、出版社の間違えによってズレてしまった例もあります。

たとえば、「たま」の絵本では、表紙と裏表紙をつなげて本をぐるりと取り囲むようなイラストを作り、ぐるぐるめぐる物語を象徴させました。絵本は単なる平面的なイラストをまとめたものではなく、ひとつの立体物として、効果的に作り上げようとする姿勢が感じられました。

制作時のエピソードとして、オーストリアの出版社と

の仕事で、登場する動物の「かえる」と「亀」を間違えて描いてしまったこととお話いただきました。完成したイラストを見た作家はショックのため、イラストレータがこんな間違いをしてしまったということで三日間ねむれなかったほどだということです。でも、結局全て描き直したそうです。ただ絵には亀の名残が有ります。もう二度と、かえると亀は間違えないだろう、とのことです。でもその後でこの本のイラストはオーストリアで賞を受けました。

#### 会場からの質問と、回答

Q：絵本を作るとき、どんな手順で進めていきますか？

A：まず、テキストを読みながら、どのシーンを描くか考えます。そして、たくさんスケッチを描きます。絵本の構成をどうするのか、ストーリーボードをつくり、バランスを見ます。シーンの一箇所に絵が片寄らないように注意します。そして、スケッチを使ってダミーをつくり、また20から30スケッチをしてダミーをつくるという段階を繰り返して作り上げていきます。最終的には、ダミーは完成する本とおなじ大きさで正確に作ります。

Q：本を作るとき、編集者とのコミュニケーションをとりながら進めますか。

A：本づくりをするとき、それがどんな本になるのかビジョンを明確に持つことが大切です。その上で、入れるべき絵を選ばなければなりません。そのときに、編集者と必ずしも意見が一致するとは限りません。「12月くんのともだちめぐり」では、私の希望とはちがう形でできてしまいました。私が考えたのとは違う原画が採用され、デザインも一部気に入らないものが残ってしまったのが残念です。専門家として編集が分かっているひとが出版社にすることが大切です。

Q：カーライさんの版画にはよく鏡文字が入っていますが、あれはなにが書かれているのですか？

A：銅版画は時間がかかる技法で、制作しながらいろいろなことを考えます。版にメモをのこしてしまうのです。あの文字は、制作と関係あることが書かれていることもあるし、そうでないこともあります。妻のカミラへのメッセージと、その返答が書かれている作品もあります。

Q：表紙はどうやって決めるのですか？

A：本の内容を正しく表しているものが選ばれることが大

切だと思えます。でも多くの場合、出版社は、タイトルを大きくしたがりますので、注意しています。また、出版社は、わらった顔を大きくあしらおうとしますが、内容にあっていればそれも悪くないけれども、必ずしもそうでもないですね。まあ、原則として、表紙は出版社が選びます。

ラウンドテーブルということもあって、前日と比べると、少人数でわきあいあいと進められました。参加者からの質問にも、図版を探して丁寧に答えるカーライさん。その飾り気のない誠実で手間を惜しまない人柄は、作品にもにじみ出ているように思います。そして、近年、4年間にわたる、アンデルセン3巻本の合計1,800ページにも上る大著をカミラ夫人とともに完成させました。イラストを描くことは、変身すること、読者や子どもたちと同一化することが最も大切だと語るカーライさん。これからのお仕事についてうかがったならば、「これをやりますという、結局やらなくなってしまうので、なにもいいません」といたずらっぽく微笑まれたのが印象的でした。

(文責：松岡希代子)



作品展会場に於けるカーライ氏

## 絵本学会第10回定期総会

日時：2007年6月30日（土）17：00～18：00

会場：武蔵野美術大学1号校舎第1講義室

議長：笹本純

書記：永田桂子

### 1. 開会の辞

三宅興子事務局長より開会の辞が述べられた。

### 2. 議長・書記 選出

議長に笹本純氏、書記に永田桂子氏が選出された。

### 3. 会長挨拶

佐々木宏子会長より、第10回定期総会開催にあたって挨拶が述べられた。

### 4. 2006年度活動報告

三宅事務局長より、資料にもとづき、下記のような2006年度活動報告がなされ、承認された。

#### ◆絵本学会2006年度活動報告

##### ◎第9回絵本学会大会の開催

6月10日（土）6月11日（日）文\_大学越谷キャンパス  
テーマ：「描かれた子ども 描く子ども」

##### ◎理事会

4月15日、5月13日、6月10日、7月23日、12月9日

##### ◎絵本学会各種委員会規程の策定

##### ◎研究会の開催

絵本フォーラム2006

テーマ：長新太の遺したもの

9月16日（土）日本児童教育専門学校

##### ◎研究に関する活動

研究活動への支援 2件

・「こぐま社の絵本」研究会 代表者：廣田真智子

・日本絵本史研究会 代表者：丸尾美保

##### ◎出版活動

絵本学会研究紀要「絵本学」第9号の刊行

「BOOK END」4号に向けての準備・検討

##### ◎広報活動

広報誌「絵本学NEWS」27、28、29号の発行

学会HPの運営

##### ◎他機関との交流

子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、  
日本イギリス児童文学学会、国際児童文学学会との交流

##### ◎学会創設10周年事業の計画策定・準備

##### ◎新会員名簿の発行準備

### ◎入退会

新入会者34名 退会者11名

### 5. 2006年度決算・会計監査報告

総会資料2006年度決算案にもとづき、三宅事務局長から2006年度の会計報告がなされた。監査担当の千田篤氏から、増成隆士氏の監査も得て、結果を適正と認める報告がなされ、審議の結果、2006年度の決算報告が承認された。（次頁資料参照）なお、「絵本学会NEWS」28号に記載された2006年度の予算案の次年度繰越金61,947円は、11,947円の誤植であることが報告された。

### 6. 2007年度活動計画について

総会資料の2007年度活動計画（案）にもとづき、各委員より下記のような説明がなされ承認された。

#### ◆絵本学会2007年度活動計画

##### ◎第10回絵本学会大会の開催

2007年6月29日（土）、7月1日（日）武蔵野美術大学鷹の台キャンパスで実行中

テーマ：「絵本と表現」

##### ◎企画委員会の活動（灰鳥かり委員長報告）

・絵本フォーラムの開催

日時：10月6日（土）10:30～16:00

会場：日本児童教育専門学校

テーマ：和の絵本を考える

##### ◎紀要編集委員会の活動（永田桂子委員長報告）

・絵本研究紀要「絵本学」第10号の刊行（NEWS30号で告知したように締切は10月1日（月）。執筆規程及び要項を整理して変更した

・2007年度絵本参考文献目録(06年9月～07年8月)の作成

##### ◎機関誌編集委員会の活動（生田美秋委員長報告）

・機関誌「絵本BOOK END」4号の刊行（2007年7月に朔北社から1,050円で）

・機関誌「絵本BOOK END」5号の刊行発行予定

##### ◎研究委員会の活動（棚橋美代子委員長報告）

・研究会等の開催について

第1回 日時：11月11日（日）13:30～15:30

場所：京都女子大学B123（B校舎1階）

テーマ：月刊絵本・絵雑誌の書誌的資料作成のための研究会

\*京都女子大学錦華殿「戦前のキンダーブック」展示

第2回 日時：2008年4月を予定

場所：東京

テーマ：直販の月刊絵本にみる今日的意味（仮）

・絵本研究の助成応募の結果について

2件の応募があり、研究委員会では、この2件の助成を認めた。なお、研究助成は3件まで行うことになっ

ているので、あと1件を7月末日締切で追加募集する。

1)『小学校国語科の説明文教材読解を支える絵本の有効性―「たくさんのふしぎ」シリーズを生かして―』代表大月ちとせ

2)「大正期の絵本・絵雑誌の研究」

代表香曾我部秀幸

◎広報委員会の活動（笹本純委員長報告）

・「絵本学会NEWS」の発行 5月（30号）、8月（31号）、12月（32号）

・HPの管理運営

◎他学会との連携

子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会、国際児童文学学会、他の学会等との連携推進

◎学会創設10周年事業の推進（竹迫祐子理事報告）

◎新会員名簿の発行（5月に発行済）

#### 7. 2007年度予算案について

総会資料2007年度予算案にもとづいて、三宅興子事務局長より説明がなされ、審議の結果、原案通り2007年度予算が承認された。なお、前年度『BOOK END』が出ず、今年度送りになったことについて、支払いはそれでよいのかという質問が出たが、今年度出版することになった2冊のうち後の1冊は次年度払いになるため問題は生じないとの回答により、了解された。

#### 8. 委員会規程について

総会資料により、各委員会の規程（案）が示されて承認された。（別掲）

#### 9. その他

・事務局より、会費納入状況を伝える書類がわかりづらく、迷惑をかけたことへのお詫びと、事務局の連絡方法としてメールと手紙以外にないことを会員に周知徹底するよう努めたいとの説明があった。

・次回大会について、開催校の柴村紀代会員から案内がなされた。

期日：2008年6月21日、22日

会場：藤女子大学（札幌）

#### 10. 閉会の辞

三宅興子事務局長より閉会の辞が述べられ閉会した。

以上

## ●絵本学会専門委員会規程

### 紀要編集委員会規程 2007.6.30

#### 第1条（目的）

紀要編集委員会（以下委員会）は、「絵本学」刊行を目的とする。

#### 第2条（業務）

委員会は、前条の目的を達成するために、次のような方針で業務を行う。

1. 絵本に関する研究を行う会員および準会員を中心に、絵本研究の成果を発表する場として「絵本学」を編集し、年1回発行する。
2. 「絵本学」の内容は、原則として論文、研究ノート、論説、報告で、未発表のものによって構成される。
3. 論文、研究ノート、論説、報告には、公募による投稿原稿と依頼による原稿の2種類を設ける。
4. 投稿原稿・依頼原稿は、委員会の査読を経て掲載される。
5. 投稿原稿・依頼原稿は委員会が査読を行うが、必要に応じて委員会の外に査読協力者を依頼することができる。
6. 投稿規程は、別に定める。

#### 第3条（組織）

##### 1. 委員長 1名

- 1) 委員長は、理事の互選によって選任する。
- 2) 委員長の任期は3年とする。

##### 2. 委員 3名以内

- 1) 委員は、委員長が推薦し、理事会の議を経て会長が委嘱する。
- 2) 委員の任期は3年とし、再任は妨げない。但し、連続して再任はしない。
- 3) 委員がやむをえぬ事由により任期満了以前に辞任した場合、補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

#### 第4条（職務）

##### 1. 委員長は、事業を統括する。

- 1) 委員長は、委員会を招集し議長となる。
- 2) 委員長は、事業の遂行のため業務の一部を委員以外の者に委嘱することができる。

##### 2. 委員は以下の職務に従事する

- 1) 「絵本学」編集上必要な編集業務について協議し、同誌発行の円滑な運営を行う。
- 2) 査読結果に基づき、それらの採否、修正指示等の処置を決定する。
- 3) 編集計画に基づき、理事会の承認を得て、刊行するための業務を行う。

#### 第5条（委員会の経費）

委員会を運営するために必要な経費は、専門委員会活動費から支出する。

#### 第6条 (改廃)

本規定の改廃は、委員会の議を経て理事会が行う。

附則 本規定は、平成19年7月1日から施行する。

### 絵本学会 機関誌編集委員会規程 2007.6.30

#### 第1条 (目的)

機関誌編集委員会は(以下、委員会という)、絵本学会(以下、学会という)の機関誌の編集、発行を目的とする。

#### 第2条 (業務)

委員会は前条の目的を達成するために、次のことを行う。

1. 機関誌の編集に関わる業務。
2. 機関誌の刊行に関わる業務。

#### 第3条 (組織)

##### 1. 委員長 1名

- 1) 委員長は理事の互選によって選任する。
- 2) 委員長の任期は3年とする。

##### 2. 委員 3名以内

- 1) 委員は、委員長が推薦し、理事会の議を経て会長が委嘱する。
- 2) 委員の任期は3年とし、再任を妨げない。但し、連続して再任はしない。
- 3) 委員がやむをえぬ事由により任期満了以前に辞任した場合、補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

#### 第4条 (職務)

1. 委員長は、業務の遂行にあたり、以下の職務を担う。

- 1) 委員長は、業務を統括する。
- 2) 委員長は、委員会を招集し議長となる。
- 3) 委員長は、事業遂行のため業務の一部を委員以外の者に委嘱することができる。

2. 委員は、業務の遂行にあたり、以下の職務を担う。

- 1) 委員は、編集プランを立案し、編集計画を立てる。
- 2) 委員は、編集計画に基づき、理事会の承認を得て、刊行するための業務を行う。

#### 第5条 (委員会の経費)

委員会を運営するために必要な経費は、専門委員会活動費から支出する。

#### 第6条 (改廃)

本規程の改廃は、委員会の議を経て理事会が行う。

附則 本規程は、平成19年7月1日から施行する。

### 絵本学会 研究委員会規程 2007.6.30

#### 第1条 (目的)

研究委員会は(以下、委員会という)、絵本の研究を発展

させるための支援を目的とする。

#### 第2条 (業務)

委員会は前条の目的を達成するために、次のことを行う。

1. 会員の研究活動への支援助成を行う。
2. 研究会等の立案及び運営を行う。
3. その他前条の目的を達成するための業務を行う。

#### 第3条 (組織)

##### 1. 委員長 1名

- 1) 委員長は理事の互選によって選任する。
- 2) 委員長の任期は3年とする。

##### 2. 委員 3名以内

- 1) 委員は、委員長が推薦し、理事会の議を経て会長が委嘱する。
- 2) 委員の任期は3年とし、再任は妨げない。但し、連続して再任はしない。
- 3) 委員がやむをえぬ事由により任期満了以前に辞任した場合、補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

#### 第4条 (職務)

1. 委員長は、業務の遂行にあたり、以下の職務を担う。

- 1) 委員長は、事業を統括する。
- 2) 委員長は、委員会を招集し議長となる。
- 3) 委員長は、事業の遂行のため業務の一部を委員以外の者も委嘱することができる。

2. 委員は、業務の遂行にあたり、以下の職務を担う。

- 1) 委員は、事業内容を立案し、事業計画を立てる。
- 2) 委員は、研究助成申込者の審査を行い、理事会の承認を得て、事業を実施する。

#### 第5条 (委員会の経費)

委員会を運営するために必要な経費は、専門委員会活動費から支出する。

#### 第6条 (改廃)

本規定の改廃は、委員会の議を経て理事会が行う。

附則 本規定は、平成19年7月1日から施行する。

### 絵本学会 企画委員会規程 2007.6.30

#### 第1条 (目的)

企画委員会は(以下、委員会という)、絵本学会(以下、学会という)の活動の一環として、さまざまな催しを企画し、それを管理運営することを目的とする。

#### 第2条 (業務)

委員会は前条の目的を達成するために、次のことを行う。

1. 絵本フォーラムを開催する。
2. 他の委員会と適宜、連携して、研究会や討論会等を企画、運営する。

#### 第3条 (組織)

##### 1. 委員長 1名

1) 委員長は、理事の互選によって選任する。

2) 委員長の任期は、3年とする。

## 2. 委員 3名以内

1) 委員は、委員長が推薦し、理事会の承認を経て、会長が委嘱する。

2) 委員の任期は、3年とし再任は妨げない。但し、連続して再任はしない。

3) 委員がやむをえぬ事由により任期満了以前に辞任した場合、補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

## 第4条 (職務)

委員長は業務遂行にあたり、以下の職務を行う。

1. 委員長は、事業を統括する。

1) 委員長は、委員会を招集し議長となる。

2) 委員長は、事業の遂行のため業務の一部を委員以外の者も委嘱することができる。

2. 委員は次の職務に従事する。

1) 委員は、事業内容を立案し、事業計画を立てる。

2) 委員は、事業計画に基づき、理事会の承認を得て、事業を実施する。

## 第5条 (委員会の経費)

委員会を運営するために必要な経費は、学会の専門委員会活動費から支出する。その他の費用は、それぞれの催しに於いて、参加費を徴収し、その収入でまかなうこととする。

## 第6条 (改廃)

本規定の改廃は、委員会の議を経て理事会が行う。

附則 本規定は、平成19年7月1日から施行する。

## 絵本学会 広報委員会規程 2007.6.30

### 第1条 (目的)

広報委員会は(以下、委員会という)、絵本学会(以下、学会という)の活動について学会の内外に広報し、会員相互の情報交換に役立つような情報メディアを管理運営することを目的とする。

### 第2条 (業務)

委員会は前条の目的を達成するために次のことを行う。

1. 定期刊行物「絵本学会NEWS」を編集し、年3回発行する。

2. 学会ホームページを設営し、これを管理する。

### 第3条 (組織)

委員会は次の者をもって構成する。

1. 委員長 1名

1) 委員長は理事の互選によって選任する。

2) 委員長の任期は3年とする。

2. 委員 3名以内

1) 委員は、委員長が推薦し、理事会で議を経て、

会長が委嘱する。

2) 委員の任期は3年とし、再任は妨げない。但し、連続して再任はしない。

3) 委員がやむをえぬ事由により任期満了以前に辞任した場合、補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

## 第4条 (職務)

1. 委員長は、業務の遂行にあたり、以下の職務を担う。

1) 委員長は、事業を統括する。

2) 委員長は、委員会を招集し議長となる。

3) 委員長は、事業の遂行のため業務の一部を委員以外の者に委嘱することができる。

2. 委員は、業務の遂行にあたり、以下の職務を担う。

1) 委員は、事業内容を立案し、事業計画を立てる。

2) 委員は、事業計画に基づき、理事会の承認を得て、事業を実施する。

## 第5条 (委員会の経費)

委員会を運営するために必要な経費は、学会の専門委員会活動費およびHP更新作業費から支出する。

## 第6条 (改廃)

本規程の改廃は、委員会の議を経て理事会が行う。

附則 本規程は、平成19年7月1日から施行する。

2006年度決算書 2006年4月1日～2007年3月31日 絵本学会

[収入]	項目	予算額	決算額	増減	
	会費収入	3,080,000	2,804,000	-276,000	
	賛助会員	300,000	260,000	-40,000	20,000円×13口
	正会員	2,720,000	2,540,000	-180,000	8,000円×317名+4,000円
	準会員	60,000	4,000	-56,000	4,000円×1名
	利息収入	5	211	206	
	貯金利息	5	211	206	
	研究会等収入	160,000	41,500	-118,500	大会は別会計
	フォーラム収入	100,000	41,500	-58,500	
	研究講座収入	60,000	0	-60,000	
	機関誌売上歩合収入	100,000	95,540	-4,460	フィルムアート社より
	その他収入	200,000	134,460	-65,540	紀要、機関誌売上、入会金34名
	前年度繰越金	1,741,942	1,741,942	0	
	合計	5,281,947	4,817,653	-464,294	
[支出]	項目	予算額	決算額	増減	
	活動費支出	590,000	341,661	-248,339	
	大会運営補助費	200,000	161,875	-38,125	ポスター等企画制作費を含む
	専門委員会活動費	250,000	119,786	-130,214	5委員会の総計
	(企画委員会)	50,000	90,670	40,670	フォーラム支出(収入41,500円あり)
	(紀要委員会)	50,000	23,116	-26,884	紀要編集
	(機関誌委員会)	50,000	0	-50,000	
	(研究委員会)	50,000	0	-50,000	
	(広報委員会)	50,000	6,000	-44,000	『絵本学会NEWS』編集費
	研究助成費	90,000	60,000	-30,000	2件
	10周年記念事業準備費	50,000	0	-50,000	
	旅費・交通費	550,000	406,470	-143,530	理事旅費等
	印刷物等制作費	50,000	35,165	-14,835	
	印刷物制作費	20,000	5,165	-14,835	紀要編集費(専門委員会設立前分)
	HP更新作業費	30,000	30,000	0	
	機関誌刊行費支出	1,700,000	0	-1,700,000	『BOOK END』4号は2007年度に発行
	編集作業費	400,000	0	-400,000	
	制作費	1,300,000	0	-1,300,000	
	印刷費支出	1,100,000	843,087	-256,913	
	絵本学会NEWS	300,000	241,920	-58,080	26、27、28、29号
	研究紀要	450,000	464,250	14,250	8号
	会員名簿	200,000	0	-200,000	2007年度に発行
	その他	150,000	136,917	-13,083	封筒、大会ポスター・チラシ等
	消耗品費支出	30,000	28,677	-1,323	事務消耗品費
	通信費支出	350,000	281,920	-68,080	NEWS、紀要等発送費・通信費
	報酬支出	500,000	263,723	-236,277	
	事務局報酬	500,000	263,723	-236,277	事務局賃金等
	会議費	30,000	3,900	-26,100	
	雑費	20,000	11,255	-8,745	振込手数料等
	予備費	300,000	183,540	-116,460	事務局移転等
	10周年記念事業積立金	50,000	50,000	0	
	次年度繰越金	61,947	2,368,255	2,306,308	①
	合計	5,281,947	4,817,653	-464,294	
[資産]	項目	予算額	決算額	増減	
	10周年事業積立金総額	1,550,000	1,550,000	0	② (前期からの繰越高1,500,000)

◎資産残高明細 2007年3月31日現在

現金	97,120
りそな銀行高槻支店	995,135
高槻天王郵便局定額貯金	2,000,000
絵本学会振替口座	826,000
合計	3,918,255 (内 積立金1,550,000円② 繰越金2,368,255円①)

2007年度収支予算 2007年4月1日～2008年3月31日 絵本学会

I 事業活動収支の部

[収入]	項目	予算額	前年予算額	増減	
	受取会費収入	3,080,000	3,080,000	-20,000	
	賛助会員	300,000	300,000	0	20,000×15口
	正会員	2,720,000	2,720,000	0	8,000×340名
	準会員	40,000	60,000	-20,000	4,000×10名
	事業収入	260,000	260,000	0	
	研究活動事業収入	160,000	160,000	0	
	フォーラム収入	100,000	100,000	0	
	研究講座収入	60,000	60,000	0	
	出版事業収入	100,000	100,000	0	『BOOK END』
	雑収入	200,500	200,005	495	
	受取利息収入	500	5	495	
	入会金収入	100,000	200,000	-100,000	入会金
	雑収入	100,000	100,000	0	『絵本学』ほか
	合計	3,520,500	3,540,005	-19,505	

[支出]	項目	予算額	前年予算額	増減	
	事業費支出	2,630,000	2,630,000	0	
	人件費支出	500,000	500,000	0	
	事務局報酬支出	500,000	500,000	0	事務局賃金等
	事業費支出	2,130,000	2,130,000	0	
	消耗品費支出	30,000	30,000	0	事務消耗品費
	印刷製本費支出	1,000,000	1,100,000	-100,000	
	絵本学会ニュース	300,000	300,000	0	30、31、32号
	研究紀要	450,000	450,000	0	『絵本学』9号
	会員名簿	200,000	200,000	0	
	その他	50,000	150,000	-100,000	封筒等
	通信運搬費支出	350,000	350,000	0	ニュース等発送費・通信費
	旅費交通費支出	550,000	550,000	0	理事旅費等
	会議費支出	30,000	30,000	0	
	広告費支出	50,000	50,000	0	
	印刷物制作費支出	20,000	20,000	0	
	HP更新作業費支出	30,000	30,000	0	
	支払寄付金支出	100,000	0	100,000	IRSCI京都大会協賛金
	雑支出	20,000	20,000	0	振込手数料等
	活動費支出	2,140,000	590,000	1,550,000	
	大会運営補助金支出	250,000	200,000	50,000	ポスター等制作費を含む
	専門委員会活動費支出	250,000	250,000	0	
	企画委員会	50,000	50,000	0	フォーラム等
	紀要委員会	50,000	50,000	0	紀要編集等
	機関誌委員会	50,000	50,000	0	『BOOK END』編集
	研究委員会	50,000	50,000	0	研究会主催
	広報委員会	50,000	50,000	0	『絵本学会NEWS』編集
	研究助成費支出	90,000	90,000	0	3万円×3
	10周年記念事業準備費	0	50,000	-50,000	
	10周年事業支出	1,550,000	0	1,550,000	
	出版事業支出	1,700,000	1,700,000	0	『BOOK END』4号制作費
	編集作業費支出	400,000	400,000	0	
	制作費支出	1,300,000	1,300,000	0	
	事業活動支出合計	6,470,000	4,920,000	1,550,000	
	事業活動収支差額	-2,949,500	-1,379,995	-1,569,505	

II 投資活動収支の部

[収入]	項目	予算額	前年予算額	増減	
	10周年事業資産金取崩収入	1,550,000	0	1,550,000	
	投資活動収入計	1,550,000	0	1,550,000	
	[支出]	項目	予算額	前年予算額	増減
		10周年事業積立資産支出	0	50,000	-50,000
		20周年事業積立資産支出	0	0	0
		投資活動支出計	0	50,000	-50,000
		投資活動収支差額	1,550,000	-50,000	1,600,000

III 財務活動の部

[収入]	項目	予算額	前年予算額	増減	
	長期借入金収入	0	0	0	
	財務活動収入計	0	0	0	
	[支出]	項目	予算額	前年予算額	増減
		長期借入金返済支出	0	0	0
		財務活動支出計	0	0	0
		財務活動収支差額	0	0	0

II 予備費支出

項目	予算額	前年予算額	増減
当期収支差額	-1,599,500	-1,729,995	130,495
前期繰越収支差額	2,368,255	1,741,942	626,313
次期繰越収支差額	768,755	11,947	756,808

## 絵本フォーラム2007 「和の絵本を考える」

絵本学会主催の「絵本フォーラム2007」を開催します。今年のテーマは「和の絵本」。ふと見まわすと、日本の伝統芸能や、日本らしい習慣、日本の風俗をテーマとした絵本が増えているようです。落語や狂言の絵本、講談調の絵本、捕物帖風の絵本もあれば、歌舞伎のセリフをそのまま絵本にしたものもあります。いっぽうで『しばわんこ』に始まる「和のたたずまい」を紹介している絵本の人気も続いています。

なぜでしょうか？和風というのは、わたしたちのルーツであると同時に、西洋風が当たり前のものとなっている現代では、エスニックのひとつとして、新鮮なのかもしれません。また日本の伝統芸能の持っている日本語力が注目されているということもあるでしょう。

和の絵本の魅力を、絵の面、言葉の面、両方から考えてみましょう。わたしたちが絵本に求めるもののひとつが、浮かび上がってくるかもしれません。

絵本フォーラムは、さまざまな分野で絵本に関わる人々の意見を聞き、また参加者が自由に意見交換する場です。皆様の参加をお待ちしています。

●日時：10月6日（土）10時30分～16時

●会場：日本児童教育専門学校

◎第一部 話題の提示～ 10時30分～12時

\* 「作家の立場から」川端誠（絵本作家）

\* 「編集者の立場から」

位頭久美子（月刊「MOE」編集者）

\* 「詩人・作家の立場から」

アーサー・ビナード（詩人・作家）

◎第二部 談話サロン～ 13時半～15時

三部屋に分かれ、第一部話題提供者を囲む語り合い。

◎第三部 談話会・情報交換～ 15時～16時

話題提供者による談話会と参加者の情報交換の場。

●参加申込方法：

メール等にて住所、氏名、電話番号、会員・非会員、参加談話会（川端、位頭、ビナード）を下記へ

●参加費（資料代）：1000円（絵本学会会員、学生は500円）

●定員：150人（先着順）

●申込み・問合せ：

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-32-15

日本児童教育専門学校「絵本フォーラム」係

Tel 03-3207-5311 Fax 03-3205-1785

E-Mail：miwasaki@jje.ac.jp

## 絵本関係展覧会案内

●軽井沢絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL.0267-48-3340 FAX.0267-48-2006

<http://www.museen.org/ehon/>

[info@museen.org](mailto:info@museen.org)

★2007年 夏の企画展

「民話えほん展 ～姿を与えられた伝承物語～」

会期：2007年7月5日(木)～10月1日(月)

人々は自然の驚異や世界の起源、また自分たちの身の回りで起こった出来事を後世に残そうと試みました。このような物語は「民話」と呼ばれ、絵本にも多く描かれるようになります。本展では、誰もが一度は見聞きする馴染み深い物語「民話」を描いた絵本や原画を紹介し、伝承物語の時を超えた魅力に迫ります。

★『木葉井悦子のアトリエ』

第7回展示：「みずまき」（1994年刊）

会期：2007年8月18日(土)～10月1日(月)

本展では、1994年に出版された「みずまき」を紹介します。この絵本は、幼い頃の木葉井と思われる少女が、生き生きと活動する、大変楽しい作品です。水をまく少女の「にわのみなさん おきてください。あめだぞ あめだぞ。」というフレーズとともにホースから勢いよく放たれた水は、大地や庭の生き物たちを潤していきます。渇きから潤いへの変化が描かれた、生命力溢れる作品をどうぞ原画でお楽しみください。

★2007-08年 秋冬展

「アメリカ絵本展 ～現代絵本を築いたイラストレーターの世界～」

会期：2007年7月5日(木)～10月1日(月)

かつて絵本の主流はイギリスを中心としたヨーロッパ諸国にありましたが、二度の大戦の後、アメリカを舞台に今日見られるようなスタイルの絵本が生まれました。本展では、20世紀中頃に迎えたアメリカ絵本の隆盛期に迫るほか、その当時活躍した作家たちから、現代の絵本界を担うアメリカの作家たちのよる作品を通して、「アメリカ絵本の歩み」をたどります。

●エルツおもちゃ博物館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

電話0267-48-3340 fax.0267-48-2006

[info@museen.org](mailto:info@museen.org)

★2007年 夏の企画展

「パペット・ワールドへようこそ！」

＝中欧の人形芸術をたずねて＝

会期：2007年6月29日(金)～10月8日(月)

愛らしい動きや表情で人々を楽しませる「パペット（人形）」たち。民族愛を育み、子どもたちの心を豊かにする人形劇のパペットは、チェコの国民的なおもちゃです。ま

た、ひとつひとつに思いを込めて作られた人形芸術は、文化資産として子どもから大人まで広く親しまれています。本展では、中欧で生み出された魅力あふれるパペットたちの世界を訪ねます。

★2007-2008年 秋冬展

「クリスマスのミニチュア展 ～聖夜を彩るおもちゃの世界～」

会期：2007年10月12日(金)～2008年1月14日(月)

エルツ地方のおもちゃの代表的なモチーフは「クリスマス」です。中でも、聖歌隊やパレードなどかわいらしいミニチュアおもちゃが、その彩に華を添えています。

本展では、クリスマスおもちゃの中のミニチュア世界を取り上げ、特集します。代表的なエルツ地方のおもちゃとともに楽しみください。

●射水市大島絵本館

〒939-0283 富山県射水市鳥取50

TEL: 0766-52-6780 FAX: 0766-52-6777

<http://www.iijnet.or.jp/chonkan/>

★姉妹都市交流事業 けんぶち絵本原画展

会期：8月1日～9月27日

展示原画 『はるふぶき』『ムーニャとほしのたね』

★第5回絵本・コロアルカディア合唱団

オータムコンサート

～美しい地球 未来の子供達に愛をこめて in 絵本館～

日時：9月30日 午後2時～

場所：大島絵本館シアター

出演：絵本・コロアルカディア合唱団／ジョイフルフレンズ(友情出演)／森清篤実(テナーソロ)／竹内春樹(クラリネット)

指揮：森清篤実 ピアノ：小林純子

料金：入館料でお楽しみ下さい

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL 03-3995-0612 / テレフォンガイド 03-3995-0820

FAX 03-3995-0680 <http://www.chihiro.jp/tokyo/>

★開館30周年記念展IV ようこそ！ちひろの家へ

会期：9月5日(水)～11月18日(日)

いわさきちひろが33歳から亡くなるまでの22年間を過ごした、下石神井の家の跡地にあるちひろ美術館・東京。ちひろが実際に暮らし、たくさんの作品を生み出したその場所で、「家」をキーワードにした展覧会を開催します。

本展では、「家」をテーマにした代表作や絵本、自伝『わたしのえほん』や家族のスケッチなどを展示します。また多目的展示ホールでは、下石神井の新築当時のちひろの家の一角を復元、その暮らしをより立体的に紹介します。人間・ちひろを身近に感じ、ちひろの家に訪れたような気持ちで絵に親しめる展覧会です。

★<企画展>生誕110年記念 初山 滋展 線と色彩の詩人

ちひろの構図一色・線・形

会期：11月21日(水)～1月31日(木)

大正から昭和にかけて「おとぎの世界」や「コドモノクニ」などを中心に日本の子どもの本の美術の世界で活躍した初山滋。その流麗な線と美しく繊細な色彩は、人々を魅了し、後人に限らない影響を与えました。本展は初山滋の生誕110年を記念して、水彩画、木版画、漫画、造本、装丁等、多岐にわたる仕事を原画と残された貴重な書籍や印刷物で紹介し、その人生とともに業績を振り返ります。ちひろは幼い頃、絵雑誌「コドモノクニ」で初山滋の絵に出会い、憧れたといいます。豊かな色彩、巧みな線描、画面の構成力など、技術的な面から二人の画家に共通する魅力を探ります。

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL 0261-62-0772 / テレフォンガイド 0261-62-0777

FAX 0261-62-0774

<http://www.chihiro.jp/azumino/top.htm>

★開館10周年記念展IV ちひろとケーテ・コルヴィッツ

一戦争と平和を描いた二人の女性画家一

会期：9月14日(金)～11月30日(金)

平和を願い描き続けたちひろと、透徹した目で社会の悲しみを捉えモノクロームの版画に刻んだケーテ・コルヴィッツ。本展では、共に一人の母として戦争と平和を独自の表現で描いた、ちひろの『戦火のなかの子どもたち』やコルヴィッツの『犠牲』等を紹介し、

★<企画展>一ちひろ美術館コレクション一

世界の絵本画家展vol.3

会期：9月14日(金)～11月30日(金)

●世田谷文学館

〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10

TEL03-5374-9111 FAX03-5374-9120

<http://www.setabun.or.jp/>

★秋の企画展

「植草甚一／マイ・フェイヴァリット・シングス」

会期：2007年9月29日(土)～11月25日(日) [全50日]

植草甚一(明治41～昭和54/1908～1979)は、昭和25年から亡くなる54年まで世田谷(北沢・赤堤・経堂)に居を構えました。早稲田大学で建築を学び、映画館勤務を経て東宝宣伝部に入社しますが、昭和23年、13年間勤務した東宝を砦撮影所の大争議を機に退社、「キネマ旬報」の同人となり、映画評論を書き始めました。以後、ジャズやミステリー、漫画、ファッションなど、同時代カウンター・カルチャーを紹介する記事を雑誌や新聞に盛んに発表し、1960年代後半から70年代にかけて若者文化のシンボリック的存在となりました。

本展では、植草甚一がこよなく愛した「映画」「ジャズ」「ミステリー」「雑学(散歩と読書)」を軸に、図書・写真・原稿・コラージュ・書簡・スクラップブックなどで構成し、今再び雑誌で特集され、あらためて20～30代の若者を中心に注目されている植草甚一の仕事と独特のライフスタイルをご紹介します。

●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1  
TEL 0266-24-3319(ミミズク) FAX 0266-21-1620  
<http://www.ilf.jp>

★チェコ絵本の現在 (いま)

会期：9月7日(金)～11月6日(火)

場所：2階第1企画展示室

ヨーロッパの中心に位置する小さな国、チェコ共和国。

中世の街並みを現在に残し、長い歴史と伝統をもつこの国には、さまざまな思想や芸術活動が往来し、それらはこどものための絵本の創作にも大きな影響を与えてきました。良質な東欧諸国の絵本文化は、近年国際的にも高い注目を集めています。モチーフや手法に伝統を受け継ぎながらも、新たなチェコ絵本の世界を模索する最新鋭の作家たちを中心に紹介します。チェコで毎年開催されるコンクール「チェコの最も美しい本」の児童書部門で選ばれ近年注目を集める最新鋭の作家の原画、版画、校正原稿約40点、絵本約30冊、閲覧絵本60冊を展示し、チェコアニメーションを展示室前で随時上映いたします。

★武井武雄 装幀とデザイン

会期：9月7日(金)～11月6日(火)

場所：3F武井武雄作品展示室

童画家、版画家、童話作家、玩具蒐集家など様々な顔を持つ武井武雄が、自身の芸術を総合的に表現する舞台として辿り着いたのが「本」造りの世界でした。文章から挿画、装幀、製本に至まで、すべてにこだわって制作された刊本作品は139冊にのぼります。また北原白秋や小川未明、三島由紀夫といった作家たちの本の装幀も手がけています。残された多くのデザイン画から武井が半生を捧げた「本」の装幀に焦点をあて、ブックデザイナーとしての一面を紹介します。

★武井武雄創作版画展

会期：11月9日(金)～1月29日(火)

木版画を中心に、銅版、陶版、コロタイプなど様々な技法に挑んだ武井の、多彩な版画の世界をご覧ください。

●ワイルドスマス絵本美術館

〒413-0235 静岡県伊東市大室高原9-101  
TEL0557-51-7330 FAX0557-51-7331  
<http://www.metem.co.jp/>

[brian@metem.co.jp](mailto:brian@metem.co.jp)

開館時間：AM10:00～PM5:00 (入館は4:30まで)

休館日：水曜日(春・夏休み、年末年始、祝日は開館)

入館料：一般 700円 団体割引(20名様以上)

小学生以下は無料

★高円宮妃久子殿下とワイルドスマスの共作絵本「夢の国のちびっこバク」展

スローライフのおすすめ「うさぎとかめ」展

会期：7月12日(木)～9月30日(日)

1階展示室

★「Twelve days Twelve months -ワイルドスマスが描く月・星・太陽」展

●ありがとう！チョーさん 長新太展 ナノヨ

場所：そごう美術館 横浜駅東口・そごう横浜店6階  
〒220-8510 横浜市西区高島2-18-1  
電話045(465)5515

<http://www.sogo-gogo.com/museum/>

会期：2007年9月8日(土)～10月8日(月・祝)

※9月25日(火)は休館

開館時間：午前10時～午後8時

※入館は閉館の30分前まで

入館料：大人800(600)円

大学・高校生600(400)円

中学生以下無料

( )内は前売および20名以上の団体料金

\*障害者手帳をお持ちの方、および同伴者1名は、優待料金(前売料金)にて入館できます。

手のひらの上で広がるナンセンスな世界。絵本作家であり、漫画家である長新太(1927-2005年)が生み出した世界です。長さんのはじめの仕事は1950年代のコマ漫画。絵本は1958年から描きはじめて77歳で亡くなるまで、実に400冊以上も作りました。

『おしゃべりなたまごやき』(1959年)で第5回文藝春秋漫画賞、『はるですよふくろうおばさん』(1977年)で第8回講談社出版文化賞絵本賞、『キャベツくん』(1980年)で第4回絵本にっぽん大賞、『ゴムあたまボンたろう』(1998年)で第4回日本絵本賞など、数々の賞を受賞しています。

子どもは長さんのナンセンスな絵本のよき理解者らしいです。一方、漫画はちょっぴり大人向け。だから、長さんのファンは子どもから大人までいっぱいいるのです。

この展覧会では、絵本、漫画にとどまらず、イラスト、エッセイといったさまざまな仕事を振り返り、代表作や初公開の作品を含む約200点の原画がをはじめ、漫画の初版本や遺品から長さんの人間そのものの魅力に迫ります。

●世界のバリアフリー絵本展

IBBY(国際児童図書評議会)では、現在IBBY(国際児童図書評議会)障害児図書資料センターが選出した2005年度推薦図書、世界12カ国からの40タイトルの巡回展を行っています。

ブリスや手話などの視覚文字が入っている絵本、イランやスロベニア、日本などの布の絵本やさわる絵本、北欧のやさしく読める図書などの特別仕様のもののほか、理解本や一般絵本の中からも、より多様な子どもたちが楽しめる要素を持つ絵本を選んでいきます。なお、日本の本は6タイトル含まれています。

お近くの展示会をぜひご覧ください。すべて入場は無料です。併設のイベントなどもありますので、詳細は各開催者にお問合せください。

★9月5日(水)～11日(火)

春日井市図書館

休館日 10日(月)

展示時間 午前9時～午後8時

最終日は午後5時まで

愛知県春日井市鳥居松町5丁目44番地 tel/0568-85-6800

主催：春日井市図書館

問合せ：会場と同じ 担当石塚

★9月15日（土）～24日（月）

三田市立有馬富士自然学習センター

休館日18日（火）

展示時間 午前9時～午後5時

兵庫県三田市福島1091-2 tel/079-569-7727

主催：特定非営利活動法人 キッピーフレンズ

問合せ：会場と同じ 担当ノ池田・山田

★9月29日（土）～10月14日（日）

高知城ホール1階ロビー

休館日なし

展示時間 午前10時～午後6時

\*併設展の図書館での展示は火・木曜日休館

高知県高知市丸の内2-1-10 tel/088-822-2035

主催：高知こどもの図書館

問合せ：高知こどもの図書館 tel/088-820-8250

★10月16日（火）～27日（土）

山鹿市鹿本図書館

休館日 22日（月）

展示時間 火～金曜 午前10時～午後6時

土・日曜 午前10時～午後5時

熊本県山鹿市鹿本町来民686-1 tel/0968-46-1310

主催：鹿本図書館

問合せ：会場と同じ 担当ノ河瀬

★10月29日（月）・30日（火）

日本図書館協会全国大会

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

東京都渋谷区代々木神園町3-1 tel/03-6407-7701

主催：社団法人 日本図書館協会

問合せ：横浜市立盲特別支援学校図書室

担当：石井 tel/045-431-1629

★11月1日（木）～14日（水）

日本福祉大学付属図書館

休館日 11月3日（土） 4日（日） 11日（日）

展示時間 平日 9時20分～午後10時まで、

土曜日 9時20分～午後9時20分まで

\*11月10、11日は大学祭

愛知県知多郡美浜町大字奥田 tel/0569-87-2325

主催：日本福祉大学付属図書館

問合せ：会場と同じ 担当伊藤

◎すべてJBBY（日本国際児童図書評議会）が共催しています。

（JBBY 世界のバリアフリー絵本展実行委員会）

## 事務局からのお知らせ

### ●研究助成について

研究会等の活動を助成する研究助成制度に基づき、申し込みを募集しましたが、追加募集への応募を含め、以下の3件の申請があり、研究委員会・理事会で検討の結果、今年度はこの3件について各3万円の助成をすることが決まりました。

1. 大正期の絵本・絵雑誌の研究 代表：香曾我部秀幸
2. 小学校国語科の説明文教材読解を支える絵本の有効性  
—「たくさんのふしぎ」シリーズを生かして—  
代表：大月ちとせ
3. 戦後絵本史における「こぐま社」絵本研究  
代表：廣田真智子

### ●運営委員会・理事会

#### ●6月30日理事会議事録

日時： 2007年6月30日（土）10:00～12:30

会場： 武蔵野美術大学 9号館6階603教室

出席者：佐々木宏子（会長）、三宅興子（事務局長）、

生田美秋、笹本純、竹迫祐子、棚橋美代子、永田桂子、

灰島かり、正木賢一

議長： 笹本純

報告事項：

1. 前回議事録の確認

2007年4月21日に開催した理事会議事録を確認。

2. 第10回絵本学会大会について

今年第10回大会実行委員長に代わって、竹迫理事より報告。作品発表に関しては、本日準備をし、明日1日の展示であることがこれまでの大会とは異なること、JR中央線の工事のため、出席者に交通の案内をすることなどが報告された。

3. 10周年記念事業について

予算案を配布し、説明。絵本学会大会のプログラムと合わせて、10周年誌を作成した。内容は、歴代会長座談会と「絵本学会10年の歩み」、絵本学会紀要『絵本学』と『BOOK END』の目次紹介である。予算は、10周年誌とドゥシャン・カーライ作品展に支出した。まだ予算に余裕があるので、今回10周年誌をまとめる際に感じた絵本学会活動のドキュメンテーションの不備を補い、今後継続的なドキュメンテーションを続けていく基礎として、これまでの活動をきちんとした形で残すことに使用したい。デジタル機器は進歩が激しいために後で利用できな

くなる可能性があることも考慮して、ビジュアルデータを紙媒体として残すことも検討したい。また、過去に紀要に掲載された論文の内容を絵本学会のホームページにアップすることも含めて、企画を提出する。予算全部は使わないで残す予定。

#### 4. 各委員会報告

##### 1) 企画委員会 (灰島委員長)

絵本フォーラムを10月6日(土)に児童教育専門学校で行う。テーマは、「和の絵本を考える」ゲストは、川端誠(絵本作家)、位頭久美子(月刊「MOE」編集者)、アーサー・ピナード(詩人・作家)の3氏を予定。第1部は、3氏の講演会、第2部はラウンドテーブル、第3部は談話会を行う。チラシを8月末発行の「絵本学会NEWS」に同封予定。広報活動に力を入れたい。

##### 2) 紀要編集委員会 (永田委員長)

「絵本学」9号を発行済。ISSN番号を取得した。

##### 3) 機関誌編集委員会 (生田委員長)

「絵本BOOK END」を刊行、先日会員に出版社から発送済みのため、間もなく届く予定。今回からアニエラルレポートとした。出版社は朔北社。定価は1000円(税込み1050円)とした。頁数を減らし、カラーページも少なくした。発行部数は2000部で、学会へ500部納入、1000部は7月上-中旬に取り次ぎで配本、500部は注文用に取り置き。費用は、概算で印刷109万円、編集に25万円の134万円程度。次回の発行は100万円以内の予算が理想であるので、80万円ぐらいに抑えることができると考えている。販売は、今回テストケースとする。

##### 4) 研究委員会 (棚橋委員長)

棚橋委員長の参加が遅れたため、三宅事務局長が代行して、研究委員会会議で決定したことを報告。11月11日(日)に京都女子大学において、月刊保育絵本・絵雑誌の書誌的資料作成のための研究会を行い(戦前の『キンダーブック』も展示)、来年4月に東京で編集者と保育現場の人々を交えての研究会を開催する予定である。

##### 5) 広報委員会 (笹本委員長)

ホームページの内容に関して、紀要の要旨を掲載することを含めて、再度検討したい。「絵本学会NEWS」30号を5月下旬に発行済み。次回は、8月末に発行予定。

#### 審議事項：

##### 1. 第10回研究大会総会議案について

開会と閉会の辞は三宅事務局長、議長は笹本理事、書記は永田理事を予定する。06年度活動報告は、事務局長が行う。07年度予算は、竹迫理事に公益法人の新会計基準に沿った書式を設定する労をとってもらった。千田監事

からのアドバイスで、来年度からは、紀要や『BOOK END』を学会の財産として報告することとしたい。07年度活動計画は、各委員長が出て説明する。07年度予算案の新会計基準への変更事項について、竹迫理事から説明があった。完全な新会計基準の移行する途上の形態であること、財産目録を来年度の決算に入れることが確認された。笹本理事が保管している出版物に関しては、再度計数して報告する。三宅事務局長から、収入に較べて支出が多いが、本年度の会計は問題ないこと、会員の増加を目指すことを総会で説明する。各委員会の予算の5万円は、立て替えておいて年度末に会計報告をして精算することとする。各委員会規程の承認は、既に「絵本学会NEWS」29号に掲載しているため、三宅事務局長から簡単に説明して承認を得る。

#### 2. 各委員会審議事項

##### 1) 企画委員会 (灰島委員長)

絵本フォーラムを10月に開催予定。(報告事項を参照)

##### 2) 紀要編集委員会 (永田委員長)

執筆規程及び執筆要項の変更について配付資料に添って検討。大筋を承認。図版の項の著作権についての文言は、「図版に用いる写真等の著作権上の掲載許可については、投稿者自身が自らの責任において事前に適正に行うこと」とする。

##### 3) 機関誌編集委員会 (生田委員長)

今回の『絵本BOOK END』は、年度内に発行したい。

##### 4) 研究委員会 (棚橋委員長)

研究助成の申し込みが、2件あった(「大正期の絵本・絵雑誌の研究」代表：香曾我部秀幸、「小学校国語科の説明文教材読解を支える絵本の有効性—「たくさんのふしぎ」シリーズを生かして—」代表：大月ちとせ)。もう1件の募集を総会で行う(応募締め切りは7月末、応募がない場合は次回の「絵本学会NEWS」で募集する)。また、研究助成の内容、応募条件、研究発表についてなど、研究委員会で再度検討する。

##### 5) 広報委員会 (笹本委員長)

今回の「絵本学会NEWS」31号を8月下旬に発行予定。内容は、本絵本学会大会の報告など。

#### 3. 会員の入退会

入会：大槻美智子、山田千都留、神永直美、吉澤みか、本田幸、高木和美、加藤康子、菱山覚一郎、原島恵、久保木健夫、村上理栄、荒木鈴奈、窪田尚、大川洋子、山部晶子、丸岡慎一。

退会：江藤秀一、天谷史緒、長沢邦子、平尾美智子、米谷茂則、遠藤美緒。

#### 4. その他

次回第11回絵本学会大会は、札幌の藤女子大学にて、  
2008年6月21（土）、22日（日）に開催されることが決定。

その他事項：

- ・事務局の保管物について  
寄贈された印刷物は、報告して事務局長の責任で処理する。保管している絵本学会の出版物は厳密に計数して管理する。
- ・退会届けの様式作成について  
事務局案の退会届を協議の上、修正して作成することになった。退会の際は、メールで書式を送り、郵送で提出してもらう。（退会の申し出は、各自の書式でも可。）
- ・会員より紙芝居に関する研究発表などを絵本学会で行いたいとの申し出があったので、許可する。
- ・他団体からホームページに本学会をリンクさせたいとの申請が来ているが、許可する。
- ・【絵本BOOK END】の学会取り分に関しては、会員数が増えているので、次号発行時に朔北社と再度協議する。
- ・絵本学会事務局のメールは、事務局担当者の自宅に転送されている旨、次回「絵本学会NEWS」に「事務局便り」として記載する。

次回の日程：12月8日（土）

場所：中央区の区民館を予定。

以上

#### ●寄贈図書のお知らせ

2007年4月～8月の間に、以下の図書が絵本学会に寄贈されましたのでお知らせします。（到着順）

★戦後60+1周年子どもの本・文化プロジェクトより  
正置友子責任編集『日米交流子どもの本・文化プロジェクト 歴史に学び、未来を拓く 記念誌』（「戦後60+1周年子どもの本・文化プロジェクト」実行委員会 2007.3）111p。

★スウェーデン大使館より

『ピッピからベッカ——スウェーデン児童文学フェア 2007——』パンフレット（スウェーデン大使館 2007）10p。

★人文書院より

R.S.トライツ著、吉田純子監訳『宇宙をかきみだす』（人文書院 2007.3）313p、2600円。

★軽井沢絵本の森美術館より

『軽井沢絵本の森美術館 2007年春の企画展 中欧の絵本・原画展＝伝統の絵本芸術から生まれた幻想世界＝』図録（軽井沢絵本の森美術館 2007）47p。

#### ●「絵本学会会員名簿 2007」正誤表

以下の誤りがありましたので、ご訂正下さい。

##### ★住所の訂正

- ・小磯 悦子（コイソ エツコ）  
住所：東京都小金井市桜町（番地の前に桜町を追加）

##### ★所属等の訂正

- ・桂 宥子（カツラ ユウコ）  
所属：岡山県立大学情報工学部教授  
Tel/Fax：0866-94-2083  
e-mail：katsura@c.oka-pu.ac.jp

##### ★2006年度で退会につき削除

- ・江藤 秀一（エトウ ヒデイチ）
- ・水谷 真紀（ミズタニ マキ）

なお、4月以後の記載事項の変更や新入会員等に関するお知らせは、次回の「絵本学会NEWS」に同封致します。

#### ●絵本学会事務局への連絡について

絵本学会事務局が移転して以来、いろいろの点で不便をおかけ致しております。Faxの設置ができないことや、週1回に集中して事務を行うため、お返事が遅くなるケースも出ています。

##### 1. 電話やFaxは使えません

大学宛てにお電話をいただきましたも、受け手が不在の場合がほとんどですので、電話はご遠慮いただけますようお願い申し上げます。

##### 2. メールは転送され、毎日受け取っています

できましたら、メール（chon-g@baika.ac.jp）を使ってお問い合わせなどをしていただけますとありがたいと思っています。メールは、転送されて毎日チェックしているので、必要なことには対応できると存じます。

##### 3. 郵便については、確実に事務局に届きます